



50

rififi



fifty



目次

サーカスの夜	吉村千夜
テーマ競作『お一人様ですか』	
松戸サイエンティスト	霜越邦彦
還るべき処	砂塔悠希
お一人様ですか	白坂匡
ぼくはお一人様	齊藤聡
恐怖の大王	赤石梢
歩いて10分	橋本さかえ
連載第1回	
眼鏡越しの空	しもこし
テーマ詩『祝』	
鎖につながれた猫	齊藤聡
月の上を歩く	入江幼夢
ぎんのそら	吉村千夜
微笑む	橋本さかえ
旅立ち	赤石梢
テーマジャンル『恋愛もの(人間同士)』	
あっくんが死んだ日	齊藤聡
結婚	赤石梢
サンタマリア	橋本さかえ
Selfish X selfish	霜越邦彦
アリシアの憂鬱	砂塔悠希
連載第2回	
T O Y	K.Shimokoshi
○ 不定期連載第5回	
黒竜に騎る男	砂塔悠希
編集雑記	
編集後記	

サーカスの夜

吉村 千夜

遠い町、小さな町は、いつも哀しげな蒼色の空のもとに、ひっそりと生き続けていた。

薄い雲のかかった、ふかいふかい蒼の空。季節は穏やかに変わってゆく。出て行ったきり帰って来ない者も、傷つき疲れ果てて足を引きずり帰って来る者も、総てを受け入れ、すがりも拒みもしないような町。

時は、淡々としていた。もちろん時には、事件もあった。普通に、人々が、それぞれの生活を営んでいたのだ。荒れ地を越えた大きな町に毎日勤めに出かけている者も幾人かいた。

そんな町に、ある日、サーカスが来ることになった。

これは事件であった。サーカスなんて、こんな小さな町に、そう滅多に来るもんじゃない。町の人々は興奮した。大人も、子供も、みんながわくわくして彼ら

の到着を待った。どんなに平穏な生活に慣れていても、少しばかりの刺激は欲しくなるものだ。そしてサーカスなんていうものは、画面や本や絵の中でしか見たことのない、それは大きな刺激だったのである。

少女はその町の小さな図書館の側に棲んでいた。母がその図書館に勤めていたので、幼い頃から本だらけの部屋に入り浸って、いろんな絵や文字で彩られたページをめくって過ごしていた。

父親も兄弟もいなかったが、近くの骨董品屋の少年といつも一緒に遊んでいられたので、淋しくはなかった。

少年と少女はとても仲が良かった。彼らは父子であり兄妹であり母子であり姉弟であり従兄弟であり親友であり他人であり恋人のようであった。幼い頃から多くの時間を共有しながら、それぞれの心には、やがてはお互いが自分の両親のようになるのだらうという予感を抱いていた。

いずれにせよ、お互いに対する感情の深さは日毎にリアルなもので、それを包み込むように隠し、親友のように遊び続ける一種切ない感覚が快樂的だったのだ。

それは自我の目覚めの一つであつたらう。齡にして十を過ぎる頃から誰もが意識するような痛み。自然と湧いてくる感情。好き だけでなく、例えば 嫌いが知らず知らずのうちに 憎い に明確に変化してゆく。夢物語ではない大人の世界があることに漠然と気付き始める、嗜好性がはつきりしてくる。そして少しずつ、時間は速く流れ始める。

けれど、そこからの長さを、彼らは知らない。時間の流れは速いのに、道は果てしもなく、遠く続くそれは決して真つ直ではないのだ。

曲がり角には何が潜んでいるだろう？ わからなかった。彼らの町は平穩で、そうそう人生に曲がり角があるようには見えなかった。

けれど信じることの自覚を持たない、スタートしたばかりの少年や少女の感じる 運命 の、何と不確かなことが。景色が色や匂いを変えてゆくことを、苦しみと感じたことのない輝いた日々には。

人々は地に足をつけて「生活」をしていた。少年も少女も、自分たちの親にならつて、その様に生きてゆこうと思つていた。山のふもとの学校には様々な級友がいて、それぞれに未来の夢を物語る。そんなとき、

彼らの目は不思議な光をたたえ、頬は染まり、唇は湿つて美しく光る。

少女は思うのだ、それぞれの夢はそれぞれに素晴らしい。けれどきつと、自分にここを離れることは出来ない。自分がいなくなつたら、あの愛しい本たちや景色を誰が見つめ、守るといふのだ？ 店先に並べられた古い壺や人形や絵や布を大事そうに撫でる少年の隣に、誰が座るといふのだろうか？

わからなかった。未来は図書館の近くを流れる河のように美しくおだやかで手の届くところにあるものであり、幸せは本のページをめくるときのにおいや、少年と二人で雨の日に屋根裏を探検したり晴れた日に河原で走り回つて遊ぶときのような、自分たちの世界の延長でしか考えられなかった。

たぶん、母の影響なのかも知れない。遠い大都会に憧れるとか、金持ちやスターを夢見るとか、大いなる名前をその地に残したいとか、およそそういった華やかな考えからはかけ離れた人だった。母は本を愛し、自然を愛し、亡き父をずっと愛し続ける。図書館を守るのは、誰よりも母が似合っていると少女は思つていた。

おそらくは、やさしい瞳がその笑いじわで一層やさしさを増すような母を、誰もが愛していただろう。少女の人生は、それだけでもう、生まれ落ちたその瞬間から優しい光に満ちていたと言えるのだ。

だからこそ、十四という年齢の割に落ち着いている自分に、少女は気付いてながらも、それを良しとしていたのかも知れない。

それは少年にしても大体同じことだった。古いものに囲まれて育った彼は、その環境を愛することを自分なりに素晴らしいことと思っていた。小さな町はそれ自体古く、それゆえに美しかった。それが好きだった。

そういう意味では、少女よりもっと年寄りくさかったのは少年の方だったろう。彼らはまだ身体の奥から湧き出てくる、抑えようのない感情というものを知らなかった。おそらくは、試練というものはもっと後にやって来るものなのだろうし、いずれにせよその日その日が一番大切なものであり、先のことなど何もわかる筈はなかったのだから。

サーカスが来ると知ったとき、さしもの少女も軽い興奮を覚えずにはいられなかった。

古い図書館の美しい画集に、少女がもうずっと前から憧れているサーカスの絵があった。とおい異国の飾り付けをした象、その横に黒い帽子をかぶり、美しい髭を整えた男の人。ピエロの玉乗り、ブランコ乗りをする美しい女の人のきらきらする衣装。

少女と少年はその絵を見ながら日がな一日、サーカスのことを話した。一体ほんとうに見るサーカスとは、どのようなものだろう。夢みるように言葉をかわしながら、やがてうとうとと、しどけない寝顔が陽の光りの中に溶け込んでゆくのだった。

サーカスは、賑やかにやって来た。町はずれの空き地で慣れた手つきで作業を始め、テントを張って、周囲にめぐらした塀じゅうにポスターを貼り付けていった。

実際には、それはそんなに大きなサーカスではなかった。花形スターもいなければ、獰猛な野獣もない。けれど町の人たちにはそんなことはよくわからなかったし、このこじんまりとした美しいサーカスが観られるだけで、十分に幸せだった。

早速、人々はいそいそとサーカスを見にいった。帰ってきた者たちはみな目を輝かせ、頬を染めて他の者

たちに自慢げに話をする。まだその素晴らしい曲芸団を見に行っていない者たちは、さもうらやましそうにその話を聞いて、早く自分も観に行きたいものだと意気込むのだった。

町は、楽しげに活気づいていた。やさしい空は、少しずつ深みを増して、秋色のそれになるうとしていた。

少女は少年と一緒に、彼らを見に行つた。

小さな胸は期待と興奮ではちきれんばかりになつていたが、さて、曲芸が始まると、声も出せずにその珍しさに見入ってしまった。

ピエロや派手な化粧をした女の人、象に乗つた少女や小人たちがにぎやかな音楽とともに入つて来る。最後に現れるのは団長だ。黒い服を着て、優美な曲線をえがいた口ひげをちよいとつまみながら、黒い帽子をとつてふかぶかとおじぎをする。

「みなさま、本日は我がサカウエサーカス団へようこそ！見るもびつくり、それは不思議な芸や、美女による猛獣つかい、素晴らしいブランコなど、みなさまに息もつかせないような数々のショーをお目にかけます。どうぞごゆっくり、お楽しみ下さい！」

テントいっぱいのお客がワアツと歓声をあげる。少女はその瞬間の素晴らしい胸をときめかせた。わくわくする、というのはこういうことを言うのだ。

彼女にとって、それは夢の世界そのものであった。図書館の中で育つてきた彼女の中には、たくさんの書物の中の、たくさんの光景や知識がひしめき合うように巣くつていたが、いまだそれらを現実に目にしたことは一度もなかった。

遠い一面の砂丘や暑い国のダンス、見渡す限りの氷の地平線や摩天楼にきらめく美しい人々。どれも、少女の頭の中にしっかりと形づくられ、何度も瞼の裏に再現されてきたけれど、結局はすべて幻に過ぎなかった。実際に目の前に繰り広げられる光景の持つ力には、圧倒的になかなかないものだ。それが今、一種茫然とするような感覚で、少女の体の中に染みわたっていった。それなのに、すべてがきらびやかすぎて、まるできらひかる硝子のように、「サーカス」が現実のものとは思えないような気持ちもどこかにあるのだ。

このせめぎあいこそが、めくるめく虚構を上演している集団の魅力であることに、無論、まだ思い至るはずもなかった。

少女は殊に、ましろい頬に美しい涙を描いたもの哀しげなピエロに心惹かれた。何と柔かな動きだろう。本の中でいつも哀しげに微笑み、そして滑稽なしくさで人々を笑わせてくれるピエロ。少女が知っていた、いつも心惹かれていた、そのままの彼は、物語に出てくるよりもずっとやさしそうに見えた。そしてその隣で一輪車に乗り、金色のピンをジャグリングしながら走り回る少女の、なんと華奢なこと。真っ白な肌、ちよつと泣きそうに大きく見開かれた瞳、きりきりと結い上げられた茶色い髪。この取り合わせはパーフェクトだと少女は感に入り、深々とため息をついた。ブランコ乗りの女の人は、まばゆいばかりに美しくった。誇らしげに胸を張って決めるポーズの、何とかなやかな指先。誰もがわあっと歓声を上げ、おおっとどよめき、はつと目を閉じ、そしてまたすぐに身を乗り出して見入る。小さな町の人々は、文字通りサーカスに釘付けになり、一人残らず心奪われた。

この楽しい時間が永遠に続くように切望しなかつたものはいないだろう。誰もが、甘く強いお酒のような美しい夢に酔いしれ、浸りきつた。濃厚に凝縮された時間は、しかしあつという間に過ぎ去つた。

団長が、夢を断ち切るようにシュルン！ と大きな音を立ててムチを一振りする。人々ははつとして何度かまばたをすると、名残惜しげに現実へと戻つていくのだ。

そうしてまだ雲の中を歩くようにぼうつとした心地でテントを後にする。空には満天の星々が輝き、さらに夢を見ているような気持ちの後びかせていた。

少女と少年も、まだふわふわした心地で夜道を歩いていた。大通りは同じくサーカスを後にした人々で溢れかえっていたが、ひとり、またひとりとそれぞれ家に帰っていき、すっかりさみしくなつた頃、少女の母と少年の祖父が迎えに来ているのが見えた。

少年はずつと無口だった。少女もまだ興奮からぬけきれず、ずつと今日のショーのことばかり考えていたのでさほど気にも留めなかつた。少年たちと別れ、図書館の傍の小さな家に戻つた少女は、あの素晴らしい曲芸の数々についてあれこれと大好きな母に聞かせてあげた。少女のあまりにきらきらした瞳をみて母は一瞬不安そうな表情を見せたが、すぐにまた微笑み、熱心にその話に耳を傾けてくれた。

もしかしたら、母にもこんなときめきを感じた瞬間があつたのかも知れない。とおい昔、まだ彼女が娘である少女くらい若かつた頃には。それくらい、様々なものを見てきたような、深い色の瞳であつた。けれども母はただ黙つて微笑みながら少女の話を聞くばかりであつたのだから、本当のところは誰にも………わからない。

とまれ、今の少女にはそこまで想いをはせる余裕などはなかつたのだから。さすがにその晩は、果たして明日からまた平々凡々たる日常にきちんと戻つてゆけるかしら、などと懸念してしまふほど、サーカスのことだけが頭を支配し、離れることはなかつた。

次の日、学校でも少女はサーカスのことばかり考えていた。級友たちも半分以上はサーカスを観に行つていたので、当然その話で持ちきりとなつていた。あれが素敵だつた、あのときはどきどきした　少女や少年たちはあらためて話の中でシヨウの様子を再現しながら、頭の中にその情景を繰り広げてゆくのだ。

そんな中、あの少年だけが、はつきりと無口であることに、やっと少女は気づいた。いつもなら何もかも

について少女とともに飽きることなく話を続けているはずなのに、じつと押し黙つたまま、動くこともほとんどしない。少女は初めて不安にかられた。

これはどうしたことだろう？

少年の目は目の前にあるものを視ている眼ではない。何か心奪われている目だ。それくらいのは、誰にでもわかつた。では何に？　サーカスだ。けれど………

ならばどうだというのだろう。つまりサーカスに心奪われて、そして彼はどうするのだろう。現実に目を向けるのが嫌になつたのだろうか。少女とともに心静かに送つてきたこの現実を？　わからない。通常ならば、きつとすぐに我に歸つて、また優しいここでの生活に戻つて行くだろう。何ものをも拒まず、すべてを受け入れるこの町の静かな暮らしに。

けれど少年の目はあからさまに遠くを求めていて、戻つてくる気配さえ見せないのだ。

なぜ………

少女は、夕べの少年がやはり無口だつたことをやっと思ひ出した。

そしてじわじわと、何かとても不快な、心の内側を

逆撫でされるような気持ちの悪さを覚えた。それはおよそ味わったことのない、どうにも受け入れがたい、初めての感覚であった。それゆえに、それが果たして何なのか、少女自身にもまったくわからない類の感情でもあった。ただ、……何故ともなく彼女には予感があった。

その予感が何なのか、それはあえて言葉に換言できない力さえ持っていた。

その日、小さな学校の授業がすべて終わり、いつものように少年と共に帰ろうと振り返ると、もうそこに少年の姿はなかった。

彼女の予感が、確固たる邪悪さをもって実現されてゆくのを、少女はただ力なく受け入れるしかなかった。

草むらは、すこしばかりむっとしたにおいを放ち、夏の終りの最後の熱気をいっぱい含んでいるようであった。

少女は足早に、ちいさな砂ぼこりをたててその道を歩いていた。

昨夜この道と一緒に歩いたときは、少年はまだもと

のままだった。一体どれほどに、不変であると信じる気持ちとその未来を、変える力を神様は持っているだろうか。こんなに静かな町の、どこにそんな力を与える隙間があると言うのだろうか。そんなことは、遠い本の中の世界の、きらびやかな大きな街々の中でしか起こらないことなのではなかったか。少なくとも少女はそう信じていたのだ。今日までは。

けれど現実というのは、何ともろく崩れやすいものなのか……そんな文章を、少女は幾度も読んできた。そしてそれは現実だった。

広々とした空に、青みがかった灰色の雲がちぎれるように漂っていた。いつも少女はその空と雲を心が痛むほど愛していた。けれども今日の雲たちは、まったくよそよそしげで、いつものように優しさに満ち溢れた光と陰を少女に与えてくれる訳ではなかった。

わかつている。少女は道を急ぎながらつぶやいた。やがて大きなテントが少女の行く手に立ちはだかり、その向こうにたくさんさんのケージや、トラックや、小さなテントがあるのが見えてきた。

少女はなるべく誰にも見られないようにそっと、大きなテントの裏に回っていった。ゆっくり、ゆっくり、

テントづたいににじるように歩いていく。少女の小さな胸はどきんどきんと波打って、今にも爆発しそうだった。

幸い誰に見咎められることもなく、少女は思ったよりも早く、目的の光景を目にすることができた。

少年が、食い入るような目でテントの中を覗いている。その視線の先では、あの一輪車乗りの少女が熱心にピンを回す練習をしているところだった。

少女はうちのめされたような気がした。ずっと心に抱いていた不安が、厳然たる力をもつて少女を容赦なく攻撃してくる。そんな気持ちだった。少年の心のすべてが、あの一輪車の少女に奪われていることは、一目でわかった。永遠に変わることないと思われるいた小さな町の光景は、いっぺんでその色を変えた。慈しみにみちた町の空も、草原も、なにもかもがその瞬間から変わってしまったのだ。

少女がずっと変わらなないと信じていたものは、何よりも少年の心だったのだと、少女はそのとき初めて知った。一体自分に何が起きたのか。それはまだ少女自身にも理解できるものではなかった。幾度か本の中で出会ったことのあるこの感情は、けれど、どうし

ても彼女自身にあてはめて考えることはできなかったのだ。

その日どうやって自分の家に帰りついたのか、少女はのちにいつまでたっても思い出すことはできなかった。どうしても。

翌日も、少女は少年を追ってサーカスのテントへ忍び込んでいった。

少女は、まったく新しい気持ちで一輪車の少女を見つめていた。不思議なことに、一輪車の少女のことは、好きでも嫌いでもなく、やっぱり別の世界の生き物であるようにしか思えなかった。まるで写真のフレームの中にある遠い世界、どうにも少女と関わりを持つようなことにはならないような、ひどくへんてこな世界の住人。彼女がこの目に見えない枠を飛び越えて、私たちの世界に足を踏み入れることなどありえるのかしら、と少女はいぶかしんだ。

昨日よりもむしろ、そういう異世界のものを見るような気持ちがあつたためだろうか。少女には一輪車の少女の気持ちや、感情の揺れがひとつひとつ、ひらめくように伝わってきた。なぜだかはわからない。けれど

ど彼女の瞳に現れるものを、すべてそのままに受け取って理解することができたのだ。

少女の頭のなかで、一輪車の少女の別の顔が、パスルをはめ込むように形作られていった。自分の芸がうまくできない苛立ち、できたときの喜び、そして……

彼女が幾度も、その美しい瞳で思いつめたように見やる先には、常にあのピエロがいた。

ピエロ。

少女の頭の中で、霧が晴れるように何かが姿を現した。

そうだ、ピエロだ。あの夜、めくるめくサーカスの夜、少女の心をもとらえて放さなかったあのピエロは、一輪車の少女にとってもあまりに切実な存在だったのだ。少女にはその気持ちを手取るようにわかった。彼女の瞳の動きはそのまま少女の心に伝わってきた。少女は一輪車の少女と一体になるような感じを覚え、そして少し混乱した。

シヨールが始まる前のピエロは、それなのにしつかりとピエロの化粧を施していて、まるでどんなものに対

しても彼自身の素顔へ侵食することを拒んでいるようだった。あの美しい一滴の涙はやわらかな日差しの中で、より鮮やかにその頬に輝いている。少女の心は少し痛んだ。少女自身のためではなく、一輪車の少女のために。あの涙が、彼に注がれるすべての喝采も、愛も、何もかもを拒んでいるように見えたから。

彼らはずっと、そうやって、サーカスの世界の中で生き続けるのだろうか。それとも彼らにも、それぞれの居場所を定める土地を持つ日が来るのだろうか。

少なくとも一輪車の少女が、二つの感情の狭間で葛藤している様子であることを、少女はなぜかしら感じ取っていた。あるいは何か小さなきっかけで、彼女はサーカスの彼女であることを辞めるかも知れない。理由はわからないけれど、少女はそう感じていたのだ。

ならば、あのピエロの気持ちを、今だけでも違うところに逸らすことができたならば、一輪車の少女は、他のものにも目を向けることがありはしないだろうか。たとえば、少年のあの熱心に夢見るような瞳に。チャンス……作ることができれば。

それは途方もない考えにもかかわらず、少女にはどうしても遂行せねばならないことのように思えた。そ

して……身体を起こした。

あとから考えると、何もかもが、誰かが書いた物語のように動いていたような気がする。

まずその日、少女はピエロが自分の部屋として使っているトラックを確認し、次の日そのトラックの陰に隠れて彼を待った。彼が着替えに戻ってきたところへ、少女はおずおずと声をかけた。

ピエロはひどく驚いた様子だった。

けれど有難いことに、ピエロはピエロであることを、飽くまでも貫き通してくれていた。震える少女にっこりと微笑み、おどけたしぐさで笑顔を招く。少女はやつと落ち着いた気分になって、ひとつひとつ、ゆっくりと話をしていた。

ピエロは黙って話を聴いてくれた。少女が自分の計画を述べ、息をつめて彼の顔を見つめると、静かに、哀しそうに微笑んで、ただこっくりとうなずいてくれた。

ピエロの顔は一体若いのか年寄りなのか、まったくわからなかった。ただそのきらきらとうるむように輝く瞳だけが、彼の年齢だとか、経験だとかを超えた、

永遠に変わらない光をたたえて少女をじっと見つめているのを受け入れるより他なかった。

その美しくきらめく瞳をみつめているうちに、それを写す少女の瞳には、突然、涙があふれてきた。

少女は自分の胸がきりきりと痛んでいることに、初めて気がついた。あのサーカスの夜をへだて、少年のうつろな目をみたときからずっと、感じていたのだ。

ずっと、こんなに切ない思いを抱えていたのに、気がつかなかったのだ。どうしてだろう。どうして、こんなに胸が痛くて、そして悲しいのか。いまやっと、理解した。

少女は少年を、彼女の心のいちばん深いところで、少女自身の土台となつているような愛情で、愛していた。愛していたことを、初めて理解したのだ。それ以外、それ以上、どう説明することがあるだろうか。ただそれだけの単純なこと。けれど自覚を持つにはあまりにも早過ぎるような気がしてならなかった。少女にはそれは……あまりに重過ぎることに思えたのだ。

それはまた絶望という言葉にも近かつたろうか。少女は少年を、彼女自身の愛情から逃がしてしまおうと

しているのだから。どうしよう。どうしよう。ただ涙は流れるばかりで、こんなに熱い熱い涙など流したことがなくて、少女はすっかり動転してしまった。

ピエロはさして驚いた風には見えなかった。おろおろしてみせたり、おどけてみせたりしていたけれど、少女の気持ちをすべてわかってくれているらしく、やがてせつなそうにうなずきながら、すっぽりと少女の頭を抱きしめてくれた。

ピエロの胸は温かかった。少女はずっとずっと前にいなくなった父のことを思い出した。まるでピエロがいとしい父のような気がして、またその瞳に涙があふれた。小さな胸がいたくていたくて、張り裂けそうに痛んでいる。どうしてこんな気持ちを味わわなければならぬのか。どうして気づいてしまったのか。あまりの悲しさに、どうしようもなく、ただ泣くしかなかったのだ。

ピエロはやさしく少女を抱きしめて、とんとんとちいさくその背中を叩いてくれた。少女の初めての慟哭がおさまるまで、じっと辛抱強く、叩きつづけていた。

ふたりとも、そっとピエロを迎えに来て、彼らの姿

を見た途端きびすを返して足早に走り去った一輪車の少女には、ついぞ気づかなかった。

次の日の夕刻、少年が少女をたずねてきた。

少年は、もしかしたら、少し旅にでるかもしれないと言った。

誰にも言わずに家を出て行くつもりだったが、少女にだけは、いわなければならぬと思ったと言った。

もしそうなって、皆が心配しても、どうかこのことは黙っていて欲しいとも言った。

少女は何も言わなかった。こうなることがわかっていたからだ。一輪車の少女が一緒なのね、と言おうかとも思ったが、やめた。意味のない言葉のように思えたから。

ばいばい、と手を振った。あつけないほど単純な別れだった。

少年はひっそりと立ち去り、闇に消えた。

少女は部屋に戻って、また泣いた。しばらく泣いて、もう泣くのはよそうと決心した。

月の明るい晩だった。少女はずっと窓辺に座り、その月を眺めていた。ずっと。

……町に生き続けるということは、どういうことなのだろうか。

ずっと一緒だと信じることは、ただの決め付けだったのではないだろうか。

友達たちがそれぞれに希望に満ちた未来を夢み、語り、想いをはせることを、私は否定してはいなかったろうか。どんな町にも、どんな人にも訪れる変化を、すべて拒みつづけていやしなかつたらうか。

ただ臆病なだけだったのかも知れない。図書館と河と草原と広い広い空、それだけがあればいいと、頑なに信じようとし続けた。けれどもその広い広い空は、どこまでも向こうへと続いているのだ。ずっと遠い世界、サーカスがさすらいつづける世界へ。

私はそれでも町を出ることはないだろう。たぶん、けれどそうでない人を、今なら理解することができ

る。
神様は、けれど、別れた時と同じくらいあっけなく、少年を少女のもとに戻してくれた。

一夜が明けてみると、町はずれの空き地は、またもとの空き地に戻っていた。サーカスはやってきたときとまったく対照的に、忽然と去っていつてしまったのだ。

あまりにあっさりした退場に、さしもの町の人々も騒然となった。あの空き地はあれほど華やかで煌びやかな場所があつたとは思えないくらい、すっかりもとのままの静かな空き地で、周りの草原の草々が風にそよそよと揺れているだけだ。ただ町中のあちこちに残つたポスターだけが、その名残りをわずかにとどめていた。そのポスターもはがれて風に吹かれ、秋が静かに深まる頃には、人々もまたもとの生活に戻っていた。

少年は二、三日家に閉じこもっていた。少女は何も言わなかつた。やがて学校に現れた少年は、少女と目が会うと決まり悪そうに目をそらしたが、学校がひけるときにはそつと側にきて、いつものように家路を共にした。

帰り道、二人は何も言わなかつた。けれどそれぞれの家に戻るとき、少年はなんともいえないせつない微笑みを浮かべて、手を差し出した。

少女はその手を取った。やわらかい握手をして、何

度かその手を振って、そして放した。またあしたね、
とどちらともなく言った。

少女は、少年が帰ってくることを知っていたので……

あの晩、銀色にかがやく月をずっと眺めてすごしていたとき、ピエロがやってきたのだった。ピエロは少女のために初めて言葉を発し、サーカスが今夜この町から去ってゆくことを伝えてくれた。一輪車の少女も一緒に行く。少年は彼女を連れ去ることはないだろう。そしてまた、彼女も少年のもとへはゆかない。少年は待つかも知れないが、また町へ帰ってくるだろう。だから心配しないで。泣かなくて、よいのだよ。

そう伝えて、ピエロはそっと少女にキスした。彼の美しい涙は、月の光を写したように銀色に輝き、きらきらと無数の粒子となって光の中に飛んでゆくようであつた。

少女は暖かいピエロの手を握り、もう二度と会うことはないであろう彼の頬にキスを返した。もう一度いとしい父を失うようで、胸が裂けそうな気がしたが、じつと黙って、その気持ちを押し隠した。そして微笑

んだ。さよなら。

さよなら。

きっとまたいつか、会えるよ。信じていけば。

そして時が再び、ゆっくりと、流れ始める……

(終)

テーマ競作 『お一人様ですか？』



テーマ競作『お一人様ですか?』

松戸サイエンティスト

霜越邦彦

一、二度と戻らない人を、あの日、見送ってた

松戸市民会館二階の八畳間にある松戸研究所は、総勢百名を超す研究員がいるという。しかし、ハウスキーパーのみさをさんは、いまだかつてその研究員とやらを見たことがない。襖を開ける前まではたしかにガヤガヤと中から人の声が聞こえてくるのだが、いつも開けた途端にシンと静まり返り、中には松戸博士しかないのである。

しかし、その日は違った。襖を開けたあと、なおもガヤガヤと話し声は続いているのである。初め、おや、とみさをさんは思ったが、よくよく見てみると、

「ギヤー、博士がタクサンいるう！ イヤー！」

それは、全部、松戸博士だったのである。八畳間は全て博士で埋め尽くされ、さらに、その博士たちは(たれパンダの記録を凌ぐように)幾重にも折り重なっていたのである。みさをさんは尻餅をついた。

訊いてみると、どうやら博士は自分のクローンを作っていたらしい。ちなみにマシンの名前は「『若いう

ちのクローンは勝手でもしる』号」だそうである。博士らしい、くだらないネーミングである。自分の細胞をこのマシンに入れて、培養し、自分とまったく同じ年齢、同じ脳内ネットワークのクローンを作ったのだ。しかし、なぜ、こんなにいるのか。答えは簡単だった。間違って百個以上の細胞を入れてしまい、ポンコラ、ポンコラとクローンが出てきてしまったのだそうだ。

みさをさんは、眉間に皺を寄せその事情を一部始終聞いた。その後、襟元を直して立上ると、お尻の辺りをパンパンとはたき、落ち着いてゆっくりと言った。

「博士、状況はよくわかりました。…わかりました

けど、輪唱りんしょうされると、ヒジョウに聞き辛いですけど」

「そうかの、ウケケケケ…」「そうかの、ウケケケケ…」

「そうかの、ウケケケケ…」「そうかの、ウケケケケ…」

「そうかの、ウケケケケ…」以下、百あまり略…」

みさをさんはコメカミの辺りをプチッと鳴らすと、懐から投網を取り出し、一気に全ての博士を捕獲した。

「おわ！ 何するんじゃ、みさをさん、ウケケケケケ

…」「おわ！ 何するんじゃ、みさをさん、ウケケケケ

ケ…」「おわ！ 何するんじゃ、みさをさん、ウケケ

ケケ……」「栗羊羹くいてえ！」「おわ！ 何するんじや、みさをさん、ウケケケ……」以下、略。

みさをさんは腕組みをすると一つ溜め息をついた。

そして、新たに懐からツアーコンダクタ風の衣装を取り出すと、それに着替え、人差指だけ立てて、その手を博士たちの前に突き出した。

「シャバにお連れできるのは、お一人様だけです」
そういうと、博士たちの方から、一斉に「え」といった嘆きの声が漏れてきた。

「お一人様ですかあ？ ウケケケ……」

「お一人様ですかあ？ ウケケケ……」

「お一人様ですかあ？ ウケケケ……」

……（中略）……

「お一人様ですかあ？ ウケケケ……」

「お一人様ですかあ？」

「お一人様ですかあ？ ウケケケ……」

そこで、みさをさんは、すかさず最後から二番目の博士を指差して言った。

「はい！ あなたご当選、けつてーい！」

みさをさんは、その博士だけを投網から助け出した。そして、博士たちが折り重なっている、その山によじ

登り、その上を這って奥にある押し入れまで行った。そこを開けると、中には前回登場した瞬間移動機があった。みさをさんは、そのドアを開けると、博士たちを投網ごと残らずそれに押し込んだ。

「い、痛いじゃ、ウケケケ……」「せ、狭いじゃ、ウケケケ……」「こ、これは一人用のじゃ、ウケケケ……」「く、栗羊羹くいてえ！」「た、助けて欲しいのじゃ、ウケケケ……」以下、略……。

みさをさんは、助け出した博士に向かって言った。

「さあ、今よ博士、リムーブボタンを押しして！」

ちなみに、リムーブボタンは修理済みである。

「うむ、わかったのじゃ。さあ、クローンどもよ消えてしまえ！ ウピョピョピョピョピョ……」

スイッチ、オン！ と、共にブンという音がし、中の博士は全て消えたのだった。

みさをさんは、といえば、腕を組んで目を細め、助け出した博士をじつと眺めていた。

その場にしばらく沈黙が続いていたが、

「さ、仕事仕事」と二人が同時に言い、お互い、自分の仕事につくと、その後は、まるで何事もなかったかのように、時は過ぎてゆくのだった。

テーマ競作『お一人様ですか？』

還るべき処

砂塔 悠希

「お一人様ですか？」

そう言われて、カツミは曖昧な笑みを浮かべた。一人、と言われればそうかもしれないけれど……。しかし、相手はカツミが一人であることを肯定したと受け取ったらしい。「どうぞ」

案内されたのはシートベルトの付いた椅子が一つある小さなブース。それに小さな窓と、小さな取っ手のついた丸い扉。カツミは席につくと無骨な二点式シートベルトを締めた。

と、突然目の前の白い壁にスクリーンが現れ、女性アテンドントが非常時の注意を説明するビデオが上映される。

「……以上で安全上の注意を終わります。まもなく当機はスタンバイを完了しアプローチに入ります。皆様お席に着きシートベルトをされてお待ちください……」

ビデオの上映が終わるとまもなくブースの照明が落とされ、軽い衝撃とともに、機体がなめらかに滑り出す。

カツミは深く息をついて目を閉じた。臉の裏に浮かぶのは楽しかった日々。ほろ苦い思い出すら今は懐かしい。

機体が水平飛行に入ると、再びビデオがまわり始める。

「ご案内申し上げます。当機はまもなく位置に着きます。お手元の取っ手を引いてシューターの入り口を開けて下さい。壺の蓋側をシューターの口とあわせて、奥まで押し込んでください。そこがシューターの内側に入りましたら、シューターの蓋をお閉め下さい。準備が済みましたら、そのままお待ち下さい」

言われるまま取っ手を引き、壺をシューターに押し込んで蓋を閉める。カラカラと言う乾いた音とともに壺が滑り落ちていくのがわかる。その音とともにすべてが滑り落ちていくように。

カツミは小窓に顔を押し付けようにして外を覗いた。

窓の外は満天の星の海。ビデオが次の場面を映し出し、荘厳な音楽がかかると窓の下のシューター出口から星屑が撒かれた。

「ああ……」

声にならない声を乗せて、無数の星屑が宇宙に撒かれて

いく。カツミはあふれ出る涙を拭うことなく、滲む窓外の風景を見つめていた。まるで今までのすべてを押し流すかのように。

星屑の最後のひとかけらが虚空へと吸い込まれたとき、青く輝く惑星が小さな小窓いっぱいに広がった。

「　　でください。皆、生まれた場所へと還って往くのです。流れる星のように……見守る星になって……」

アナウンスをきっかけに長い霧笛が艦内に響き渡る。そして、船は短い航海を終わらせるべく惑星へと戻っていく。この航海が終わるころには、すべてを忘れられるだろうか？いや、すべてが浄化され、記憶の海に流されていくのだろう。船を降りれば、「お一人様ですか」の問いかけにも『YES』と答えられるだろう。胸の内側はまだ痛んだとしても。

カツミはシートに深く腰掛けなおすと、スクリーンに映るゆっくりと近づく青い惑星を見つめた。

テーマ競作「お一人様ですか」

お一人様ですか？

白坂 匡

宇宙暦XX99年。

今年は、就職永河期と言われているが、俺は無事にある大手の貿易会社に就職することができた。

誓約書に網膜・指紋証明も提出し、入社式におも向いた。

社長の挨拶は、この時節炳お決まりの奴だった。

「新入社員諸君、この不況の中でいかにして我が社が生き残るかを考えて欲しい。ただ待っているだけでは、だめだ。自らチャンスを掴む為に、頭も体も使って努力してほしい。」

挨拶が済むと、新人研修と向かうはずだった。俺達は皆宇宙船に乗せられた。

ところが、いきなりその宇宙船がハイジャックされたのだ。会社や宇宙警察とハイジャック犯の間に、どんな取引が行われたかはわからない。ハイジャック犯達は、俺達を見知らぬ惑星に降ろした。

そこは、まったく知らない惑星だった。

何故か、俺達は分散してバラバラと何もないところで降ろされた。男女何人かづつ降ろされ、当然一緒に行動することになった。

自己紹介をし、これからどうするかを話し合い、自然とリーダー格とか役割分担みたいなのが、できていった。

当然、どこかの街を探して、宇宙警察へ届けようということになった。

しかし……。

やつとの思いで着いた街には、宇宙警察はおろか、その惑星の警察もなく、街のおまわりさんしかいなかった。

おまわりさんは、俺達の話聞いてくれはしたが、自分はどうしようもないと言う。

その上、この街には、惑星間通信機さえもなかった。

おまわりさんの言うことには、この惑星に一ヶ所だけ恒星間通信機のある街があるらしい。

しようがないので、結局俺達はその街へと向かうことにした。

しかし、俺達は新人研修に向かうところだったので、金はほとんど持ってなかった。その上、この惑星では銀河共通のクレジットカードさえ使えなかったので、まず俺達は働いて金を稼がなくてはならなかった。

この惑星にも不況の沼は押し寄せていたが、帰りたい一心で皿洗いで何でもこなした。働きながらの手さぐりの苦勞の多い旅の途中では、仲間と何度もケンカをし、何度も分裂しかけた。何人かは途中の街で生き甲斐を見つけたり、旅を続けるつらさに、脱落した。そうして、俺達は何とか無事に目的の街にたどり着いた時には、一年近くが経過していた。

この街のどこにその恒星間通信機があるかどうかからないので、俺達は手分けして街中で探した。喉も乾いたので、とある一軒の飲み屋に俺は入った。

「お一人様ですか？」

「ええ、まあ。」

どこかで見ることがあるようなバーテンは、ちよつと意味ありげな顔をした。

俺はついでに、恒星間通信機はあるかと聞いた。

そこでまたバーテンは、聞いた。

「お一人様ですか？」

「いや、仲間が何人かいる。」

「何人ですか？」

バーテンは、どこかずれた質問をした。

「5人だが……。何か関係あるのか？」

「5人ですか……。では、2人脱落ですね。」

「!？」

何でこのバーテンが、俺達の始めの人数を知っているのか？

そう思った時に、俺はこのバーテンの顔をどこで見たのか、思い出した。

この男は、就職した会社の人事の採用担当課長だった。

これは、どうやらすべてしくまれていたことらしい。これが、宇宙で生き残る為のすべと字が、この会社のサバイバル研修だったらしい。大手の会社の考えることはわからない。一時は辞めることも考えたが、この就職難に職にありついただけかもしれませんがと考えた。まあ、一年間、アルバイトしたと思えばいいのだ。

ちなみに、一人でたどり着いたものは、失格らしい。協調性がまったくないのも、会社にとって困るという理由で。

数年後にもつと恐い話を聞いた。あの研修の不合格者は、あの惑星ですつと生きていくか、または、処分されてしまつらしい。

入社時に出した誓約書には、そうなつてもいいという同意事項が含まれているらしい。

ということは、あの二度目の「お一人様ですか？」の問いにうなづくと、あの人事採用担当課長に殺されていたかもしれないのだ。

テーマ競作『お一人様ですか?』

ぼくはお一人様

齊藤 聡

ぼくは気がつくときガソリンスタンドの前にいた。

まわりは見渡す限り赤茶けた砂の地平線が広がっている。わずかに岩が転がっていてアクセントとなっている程度。それ以外には一本の舗装された道路がガソリンスタンドの前を右から左に伸びているだけ。

「ここは……」記憶を探るが以前の記憶がまったくない。ぼくはどのようにしてこのガソリンスタンドにやってきたのか、このガソリンスタンドはなんとという国のどこに位置しているのか。「ぼくは……誰だ?」ぼくには個人的な記憶がなかった。

ぼくはそれからガソリンスタンドの店員をしている。

だが、ぼくがこのガソリンスタンドにいることに気づいてからいままでどれくらいの間がたったか分からないが、車は一台もやってきていないし、目の前の道を通りすぎた車もなかった。自動車は一台も通らず、しかし気がついて

みるとレジのお金は増えている。そしてガソリンや軽油の備蓄量は目に見えて減っている。棚のエンジンオイルやタイヤすら減っていた。

そしてぼくはなぜかそういった商品の発注方法を熟知している。発注をかけるとその二日後にはガソリンや軽油の備蓄量は増え、棚のエンジンオイルやワックスやタイヤは増えているのが常だった。ふと気がつくとき、商品は増えていて、それを配達してきた人間に出会ったことはない。

商品だけではない。ガソリンスタンド裏にある冷蔵庫のようなところにぼくは寝泊りしていたが、そこにある冷蔵庫の中のビールや食料品はなくなりかけるときちゃんと補充された。もちろんそれを補充に来る人にあつたことはない。いつのまにか気がつくとき増えている。

こんな荒野の真中だというのに水は水道管から無限に出てくるし、電気もガスも常に安定して供給されていた。

そんなある意味で非常に恵まれた環境でぼくはいままで一台として来ていない自動車を待ちつつつけた。

そんな風に過して何日が過ぎただろう。

地平線のはるか向こうからかすかにエンジン音が響いてきた。それは黒塗りの高級車だった。荒野を延々と走って

きたはずなのにその自動車はつい百メートル先の自動車生産ラインから出てきたばかりのような光り輝く塗装をしていた。なぜせんぜんほこりっぽくなっていないのだろう、ぼくは疑問に思いながらも仕事を全うするためにその車に近づいた。車はなめらかにカーブを描くと給油機の横にぴたりと止まった。

「いらっしやい。レギュラーですか？」ぼくは運転席の窓越しに、ゆっくりと下がり始めた濃い色の窓ガラスに向かって訊いた。運転席には誰もいなかった。

「一人かね？」ふいに後部座席から声がしたため、ぼくは口から心臓が飛び出すかと思った。

「乗りたまえ」その声は続けた。ぼくは声のするほうに視線を転じる。そこにはセルロイドの人形がいた。

首がパクパクと動き、ぎよろりとした瞬きをしない目がぼくを凝視していた。ぼくは後部座席のドアをあけるとおそるおそる車の中に入った。

「元気かね」人形はなんだかうれしそうに切り出した。ぼくは黙っていた。

「そつか……」人形は独り合点する。「記憶はないのだったね。それがこのゲームのルールだったよな。ぼくがこんな姿で君の前に現れるとは君も予想しなかったに違いない。だ

が、これはゲームのルールには反していないよ。実体以外の姿ならばプレイヤーに接触することはルールで認められているからね」人形は目玉をぐるぐる回した。

「ぼくにはなんのこともやらさっぱりわからない」

「それはわかるよ。だが、説明することはできない。ぼくが君と接触することはルール違反ではないのだが」

ひどい話だとぼくは思った。だが言葉にはしなかった。セルロイド人形にはそうさせない迫力があつた。

「ゲームはいつまで続くんだ？」

「うーん、それを教えるのがルール違反かどうか聞いたことがないな……聞いたことがないということはたぶん違反ではないのだろう。ええと……ゲームの期間だね。たいしたことはない。あと、五十六億七千万年だ。正確にはこれからマイナス一年かな」

ぼくは別に驚かなかつた。

セルロイド人形は言いたいことだけ言つと、ぼくを残して去っていった。

「五十六億……」

期間は問題ではなかつた。ぼくが一人でいることが問題なのだった。

テーマ競作 「お一人様ですか」

恐怖の大王

赤石 梢

1999年7の月というノストラダムスの大予言を、半信半疑でいる人も多いかもしれない。

隕石落下説や神・天使降臨説等 etc.

7月も押しせまってまだ何も無い今、もう来ないだろうとたかをくくっては、いないだろうか？

しかし、恐怖の大王は、すでに降ってきているのだ。
目に見えない形で…。

そもそも、恐怖の大王に目に見える形があるのは、かえっておかし
くはないだろうか？

原初から、一番の恐怖とは目に見えないもの、理解できないもの。

田舎の外にあるトイレ、部屋の隅っこにいる座敷童子、暗い森や
道に出るお化けの類。

だとしたら、恐怖の大王が目に見えると思うほうが間違いだ。

最近、大した理由もなしに、腹が立ったり、しゃくにさわったり、
してはいないか？

そして、そのうち、殺し合う。

気に入らない相手はもちろん、日頃仲のいい相手もまた…。

あちこちで争い（いさかい）が起り、隣人同様が殺し合う。
殺られる前に殺る。

もちろん、戦争も起る。

大した理由は、いらない。

大義名分もいらない。

誰しも、そんな冷静さはない。

誰もそんなことは、気にしない。

誰も他人のことを気づかわない。

又は、生きを氣力を失って自ら死を選ぶ。

氣力のなさが体全体に及び、体の機能さえ働かなくなる。

生氣が失せて、死ぬ。

そうして、最後の一人になる迄……。

そうして、最後の一人が見るものは？

それから、壮大な花火があがるかもしれない。
幾千、幾万の隕石が降ってくるかもしれない。
しかし、観客はただ一人。
すでにとり乱すこともない。

そして、最後には恐怖の大王だけが残るのかもしれない。

テーマ競作『お一人様ですか？』

歩いて一〇分

橋本 さかえ

今年、始めて袖を通したシャツは、とても残念なことに、穴があいていた。おやおや、とても残念。仕方ないから他のにする。一年は入れ替え不要と言われていた防虫剤は、白いすかすかの袋になっている。

「こんなものよね」

溜息混じりの言葉と一緒にこれはごみ箱行き。

ゆううつ。どんな漢字だった、かと、考えながら、ドアを閉めた。空はどんより。雨、降るかな。傘を持っていくならもう一度、ドアを開けなきゃならない。面倒。そんな言葉が鍵の上で踊っている。そんなときの合い言葉を、私は知っている。

「ま、いいか」

どうしてこんな気分なのか、理由はよく分かっていた。

世界一と、言ってもいい。あの子と会うためだ。とつてもルーズなあの子に。話していて、いらいらするあの子に。

待ち合わせは、あの子の好きなドリンクバーのあるあのフアミリーレストラン。そうだ、目に浮かぶ。ティーバックを当たり前のようにごっそり持つてくるあの姿。

「明日、会おうよ」

残念だ。断る理由が見つからなかった。

「ま、いいか」

そうだ。私は、聞き上手の、断り下手。そして、この嫌な年中行事に自ら参加する。

最初はそうでもなかったのだ。話し上手のあの子は、いろいろな話題を次々に話す。そうなの。へえ。そう、言つてればよかった。

ところがあの子の愚痴にまで頷いてしまった。それがいけなかった。私は、どんだんあの子のごみ箱。そして、私にはごみ箱を、空にする機能がないのだ。

歩道橋を渡りながら、嫌なことを思い出した。

待ち合わせに駅前の噴水の前、つてことがあった。あの子が使つてる駅だ。六時には駅に着くと言つたあの子は七時になつてもまだこない。痺れを切らせて部屋に電話をした。出ない。留守電にもならない。また、切り替え忘れてるんだ。携帯持てよ。呟く。私の携帯番号知つているのに、普通こんだけ待たせたら、なんか、言つてこないか。私はぶつぶつ、噴水を相手に呟く。ほりやね。これがつきあい始めたんばかりの彼氏だったらよ、三時間ぐらい、簡単に待てるわね。でもさ、なんであの子のために、私の時間を使わなくつちやならないわけよ。かわいそうな噴水はかわいそうな私の愚痴を黙つて聞いている。

更に三〇分。

私は噴水にさよならをした。

三日後、あの子はいいわけをしなかった。

そして、謝りもしなかった。

「あの日、会社のみんなと飲みに行っちゃってさ。今度さ、どこで待ち合わせする？」

「……喫茶店」

あんた、お人好しなんだよね。私があの子と約束があると
言ったら、大人の彼女はそう言った。彼女はいつも落ち着い
ていて、はつきりしていて、適切で、好き嫌いが激しい。人
は彼女みたいな人を完璧主義と呼び、そして、彼女は友達を
選ぶ。彼女は私と情でつきあっている、そう、言った。

なんだ、それ。

「情よ、情。いてもいなくても同じなんだけど、それならい
てくれた方がいいという。だいたい、あの子みたいな自惚れ
タイプは、私は合わない。いつも自分の話か、上司の愚痴じ
やないの。私、むかついて、そんな会社やめたらって言った
ことがある」

「なんて、大胆な」

「何が大胆よ、普通は言う。そしたら、あの子なんて言った
と思う。仕事は気に入ってる、とき。何、それって感じ。あ
んたもほどほどって言葉、覚えなさい。おにいさん、こっち
に生中ひとつ」

そう、私は彼女みたいになれない。そうして、こんな雨の
降りそうな空の下を歩いている。

約束だしね。

ああ、親のしつけがきつと良かったのだよ。約束は破って
はいけないという、いいね、いいね、いい心がけではないか
と、自分で自分を慰めてみる。何、キャンセルの仕方はわか
らないだけじゃないか。溜息。人はそういうのをなんていう

か、知っている。

「お人好しは不器用につながる」

そのファミリールェストランはとてもポップなドアで私を出
迎えてくれた。日曜日を気軽に過ごしている親子連れがかな
らず、ランチバイキングをしているような場所だ。私は羨ま
しくなる。

私はね、ここで、あの子と会うためにここに来たのだよ。
入り口で待っていると、にこやかな笑顔の店員がうれしそ
うに聞く。

「お一人様ですか？」

「……はい」

「喫煙席と禁煙席とございますが」

「すみません。後でくる連れが煙草、吸います」

「……？お二人様」

「……はい」

ダメだ。嘘はつけない。

おわり

眼鏡越しの空

しもこし

風が吹く。
雲が流れる。
心地よい陽射。
風に揺れる木。

モノクロの光。
抜けるような青。
鮮やかな緑。
流れる切り取られた一瞬。
幻想的な水の飛沫。
澄んだモノトーンの世界。
見透かせる魔法の紙。
突き抜ける傷み。
凍えるわらい。
ほのかに暖かい笑み。

誰もが心に眼鏡をしています。
十人いれば、十個の眼鏡があります。
一つとして同じ眼鏡はありません。
十人いれば、同じようで違う、十個の世界。
レンズは曇っていませんか。
百人いれば、百個の世界。
レンズは歪んでいませんか。
青い空の中、白い月を見つかりますか。
青い空の中、最後に白い月を見たのはいつですか。

彼の存在には入学式のときから気付いていた。と、言っても、智美の洞察力が特に優れているという訳ではなく、単に、彼、大石光輔が目立つ存在であるというだけである。
大石は背が高く、いつも背筋をピンとさせスタスタと歩いている。話声もしっかりとしていて通りがよい。意見があれば、はっきりとものを言い、わからないことがあれば、恥ずかしがることなく誰にでも尋ねる。
いつも下を向いて歩き、話すときは語尾が弱々しくなる智美とは大違いである。

一年生のときはクラスが違ったせいもあって、ほとんど話す機会もなく「ああ、かっこいい人がいるなあ」以上の存在ではなかった。

朝食のときだった。テーブルの向かいでトーストをかじっている弟が話しかけてきた。弟・・・利通は年子で、今は同じ高校に通っている。

「姉ちゃん、昨日、ゴンを散歩に連れて行かなかったろう」

「ゴンは一年ほど前に智美が拾ってきた犬のことだ。」

「うるさいなあ。昨日はちよつと疲れてただけ」

「今日は行きなよ」

「言われなくたって行くよ」

「それよりさ、姉ちゃん、最近、ずっと眼鏡してるよね・・・何で。眼鏡、嫌いじゃなかったっけ」

「智美はぶっきらぼうに答える。」

「べつに、わたしの勝手にしよう」

「出かける時間も変わったし、何か変なんだよなあ」利通の方を一瞥しただけで、それには答えなかった。

「智美は弟をうつつとうしいと思っていた。何かあることに一々干渉してくる。」

利通は続けた。

「いつも俺が出るころに『遅刻する』って言いながら起きて来てたのに。絶対、何かある」

「うるさいなあ。わたし、もう、行くから」

「たまには一緒に行くこうよ」

「それだけは、ぜーったい、『や』」

「智美は、悲観的な性格の自分と比べ、利通の楽天的なところが嫌いだ。妙に鋭い所も嫌いだ。智美は自分でも思うくらい鈍い方である。学校の成績を比べても、大体の科目は弟の方がよい。いいところはみんな弟に持つていかれたようだ。」

「親に言われることも違う。」

「利通は成績もいいし感もいいので当然褒められる。親もついつい喜んでしまう。」

「智美は、怒られるわけではないが励まされる。しかし、これといつて何かがよくなるわけではないので期待はされない。」

「親に差別しているつもりはない。できる子に『よくやったな』、できない子に『がんばれ』そう言っているまでのこと。誰れが悪いわけでもない。ただ、できのよい弟や妹をもってしまった者が持つ、共通の宿命なのではな

いだろうか。

ところで、利通が言うように、最近、智美は眼鏡をかけたばなしだった。元々、目は良くないが、以前は授業中にかける程度だった。

眼鏡をかけると、すました冷たい奴に見える。智美はそう思っていた。もちろん智美が勝手にそう思っているだけなので、周囲の人が本当にそう思っているかは別問題である。が、とにかく、そのせいで智美は眼鏡が大嫌いだった。

かけっぱなしにしたのには理由がある。

学校では同級生になった大石が斜左前の席に座っていた。初めのうちはどうということもなく、時々「かっこいいなあ」と見るくらいだったのだが、一学期の中間試験が終わり、それに点数がついて返ってきたときだった。

たまたま、最初に返って来た彼の地理の点数が見えてしまった。彼は成績優秀だという噂があったが、その点数は智美よりもわずかに良い程度だった。その時は「思ったよりそんなに差はないんだ」と考えていた。

しかし、それは甘かった。

差が少ないのは、それだけだったのだ。次の数学では大差がついていた。智美は怪しまれないよう普段から眼

鏡をかけたばなしにして、彼の答案用紙が返って来るとびそれをこっそり盗み見た。

結果、それは惨憺たるもの。全敗だった。

どうも、彼は地理だけが少し成績が悪く、逆に智美の方は地理だけが比較的良いため、差が少ないように見えただけのことらしい。

怪しまれないように眼鏡をかけたばなしにするようにしたわけだが、智美はそれからもかけ続けた。それは、彼を監視するのが目的だった。元々自分の敵う相手でないことはわかっている。が、いくらなんでも、

(このままではあんまりだ)

そう思った。

つまり、彼のあら捜しが目的というわけだ。

家を早く出るようにしたのは、大石の登校時間に合わせるためだ。智美が校門をくぐる頃、自転車通学の大石が自転車置場に自転車を置いて出てくる。智美はその彼の後姿を見ながら昇降口へと向かう。

(いつもながら、見事な背筋なこと)

彼のしゃんとした後姿をまねて、背筋をピンと伸ばしてみる。前をしっかりと見て歩く。スタスタと歩いてみる。

(うつ、疲れる)

猫背の人間が急にやっても疲れるだけである。智美はすぐにやめて、腰をトントンとたたいた。

「何やってるの、トモ」

背後からの声だった。智美は驚いて振り返る。

「え、あ、モモ。おはよ」

同級生の倉下桃子だった。

「ねえ、一人で何やってたの」

「ああ、ええと、ちよつと、背筋をね、．．．しゃんとした方がいいかなあ、．．．なんて」

「『しゃんと』ねえ。．．．この朝っぱらから、何の脈絡があつてのことなの」

「な、何でもないの。気にしない、気にしない」

智美は焦りながら笑つてごまかした。

「うーん、変な奴」倉下桃子は、視線を智美から前へ移した。と、そこで、大石に気付いた。「ああ、あそこに

も『しゃん』とした奴がいる」

それを聞いて智美は再びビクツとした。間違いなく大石のことを言っている。倉下は智美の方に向直り、まるで

わかりきっていることを確認するよう平然と尋ねた。

「ねえ、トモって、大石君が好きなんだよね」

それを聞いて、智美の心臓はバクバクと鳴った。

「．．．、え．．．、あ．．．、う．．．、ちが、ちが、ちがあつて」

倉下は立止まって一つ溜め息をついた。

「はあ．．．。あんたって、わかりやすいやつ」

そんなことのあつた日の英語の授業で事件が起こった。

智美はいつも通り斜め前にいる大石を見ながら授業を聞いていた。授業では一人ずつ順番に英文を読み上げ、続けて同じ人がその文の和訳をこたえる方式がとられてい

た。

順番なので自分がどこら辺を読み訳さなければならぬ

いかは予想がつく。あらかじめ、あたりそうなところを

予習しておけばよい。智美は先週あたつたので、しばら

くは廻つて来ないはずだった。

．．．そう、廻つて来ないはずだった。

それは脈絡なく、突然だった。

「じゃ、次、．．．」名前が呼ばれる。

最初、何が起こつたのかわからなかった。

(あれ、今、呼ばれたの、わたし)

ぼんやりと教壇の方に向き直ると、先生が、ほら、お

前だよ、と言いたそうに智美を指差した。

「え、あの、わた・・・わた、え、なん・・・え」

パニックになった。今週は絶対あたることが無いだろうと、まったく何も用意していなかった。それどころか、今の今まで、誰がどこまで読んで訳していたのか、それさえもさっぱりわからなかった。

おまけに智美は悪いことに英語が一番の苦手だった。

智美は教科書を持って立上ったが、どこを読めばよいかわからず、おろおろするばかりだった。

そんなとき、大石の動きが目に入った。

大石は教壇の方を向いたまま、自分が開いて見えている教科書を智美に見えるよう右へずらした。そして、指でそのページの「ある」部分を押さえた。

どうも、そこだと言いたいらしい。

感謝である。

「ア、I have ... been ... (略)」

たどたどしいながらなんとかあった。しかし、和訳の方は予習してないので、まったくできない。

どうしようかと考えながら、再び大石の方を見ると、彼は、今度は教科書ではなく、ノートを開いて見ている。

それには、少し大きめの字で日本文が書いてあった。智

美が英文を読んでいる間に訳したらしい。

(すごい)

とりあえず、ほとんどボー読みでそれを読み上げた。

「わ・・・、わたしは・・・(略)」

(ふう、何とか助かった。ありがとう大石君)

と、安堵して座ろうとしたときだった。

「誰が、座っていいと言った」先生だ。智美はビクツとして立ちなおした。「授業はちゃんと聞いていること。訳すときは大石のノートじゃなくて自分の教科書かノートを見ること。いいかあ」ばればれだ。あちこちから笑い声が聞こえる。そして、先生は黒板の方へ向き直りながら、何気にとんでもないことを言った。「授業の始めから、大石の方ばかり見て・・・たまには黒板と先生も見てくださいよなあ」

教室の中にドツと歓声があがった。

智美の顔が赤くなる。

「・・・うつ、・・・せつ、先生、何てことをっ」

「え、違うの」

智美は返答に困った。「違うの」と言われても、「見た」とは言えないし、「見ていない」と言つにも、何かごまかせる言いわけがあるわけでもなかった。大石の方を

見ると、彼は智美のを見ていた。・・・というより、今は、クラス中が智美のを見ていた。

ふと、大石の向こうに、倉下桃子の顔が見えた。彼女の席は、そこ・・・大石の左斜め前、なのである。倉下も智美のを見ている。・・・それも、お菓子を食べながら。

(なに・・・)

その瞬間、智美にある考えが浮かんだ。

「先生、わたしは大石君を見ていたのではなく、お菓子を食べてる倉下さんに気付いて、注意しようと向こうを見てたんです」うん、よし、これならいける。我ながら名案。(ごまかせる)

「あの、先・・・」

そこで倉下が強引に口を挟んで割り込んだ。

それもかなり大きな声で。

「先生、トモが大石君を見てるのは・・・」

(なにっ)

智美はめまいがした。

『授業の始めから』じゃなくて、『朝から』です」

(と・・・とどめだ・・・)

再び教室に歓声があがる。

くらっ・・・。

智美は体の力が抜け、崩れるように腰を降ろした。

頭の中が真白になって、うなだれる。

その真白になった智美の頭の中では、

(終わった・・・)

その「言葉」だけが、ふわふわと繰り返して繰り返して漂っていた。

それから何日かしてから放課後、図書室で本棚から写真集を取ってきて見ていた。それは「空」の写真集だった。同じ空でも、天候や時間帯、撮影場所で随分と違う。四方空一面を写したものもある。見通しの悪い丁字路によくあるミラーのようだ。広い範囲をカバーしている。その写真には太陽が幾つか写っていた。時間をずらして同じフィルムに撮影したか、同じ場所で撮影した写真を合成したか、どちらかだろう。

「昼間見える白い月」そんなものもあった。それは、三日月だった。それは、たなびく雲の切れ間から、ひよっこり顔を出した、そんな感じの月だった。どこか臆病で、まぬけな感じがしたが、何となく憎めない、そんな月だった。その写真は表紙にも使われていた。表紙の方

にはこの「月」が見当たらなかつたが、よくよく見ると一枚の写真が表紙から裏表紙まで続いていた。「月」は、ちよつど背表紙の所にいた。

智美は妙にそれが気にいり、借りることにした。

(他にどんな人が借りてるんだろ?)

本の背表紙の裏に貼つてある図書カードを見てみた。

(あ)

一人だけ、やけに強くてきれいで目立つ名前が書かれてあつた。見慣れた名前……大石光輔だ。自分の知らない大石をまた一つ見付けたように思い、智美は、それが何故か妙に嬉しかつた。

カウンターで図書カードの最後に自分の名前を追加する。自分で言うのもなんだが、どうもバランスの悪い字である。大石と同じカードに自分の名前を書くのが恥ずかしいくらいだつた。

教室に戻ると、ほぼ時刻を同じにして大石が入つて来た。他には誰もいない。二人だけになつた。

「あ、今、帰るとこ」

「え、うん。大石君は」

「ぼくも帰るとこ」

「練習は、もう終わったの。早いんじゃない」

大石はバスケット部に属している。

「うん、明日……土曜の午後、試合なんだ」

(知ってる、知ってる)

「それで、今日は簡単にフォーメーションを合わせただけで終わりにしたんだ」

(よくわからないけど)「ふうん」

「よかつたら試合、見においでよ」

「うん、邪魔じゃないなら行こうかな」

(行く行く。既にそのつもりよ)

「そんなことないよ。いい場所とつておこつか」

「ううん、気にしないで」

(ああ、こんな、さえないわたしにさえも大石君は優しいのね……でも社交辞令、社交辞令。真に受けたら厚かましい奴じゃん)

「そう。遠慮しなくていいのに」

「たしか決勝なんだよね……何の決勝なの」

「インターハイ県予選、決勝リーグ。これにあと一勝すれば、インターハイ出場が決まる」

「へえ、すごい」(の、かなあ、やつぱり)「インターハイ出場つて、やつぱり、大石君の夢なの」

「いや、『出場』は飽くまでも通過点。目標は全国制覇、

めざせ田臥勇太かな」

「・・・誰、それ」

「あ、知らないか。高校九冠をした、すごい人。ぼくには、九冠はもう無理だけど、プレイヤーとしては、彼を越えたい。当面の目標の人、かな」

「それが、『ながれ山 三四郎』」

「『田臥勇太』・・・でも、最終目標は、もっと大きなところにあるんだ。マジックジョンソンを越える」

「・・・誰、それ」

「・・・うーん。NBAにいた、とてもすごい人」

「それが、『ながれ山 三四郎』」

「『マジックジョンソン』。ふざけてない」

「え、そんなことは(ないんです。すみません)」

そこで、大石は智美の机の上に置いてある本に気付いた。智美は慌ててそれを鞆にしまおうとしたが、一足遅かった。

「あれ、その本」

「え、ああ、これのこと・・・。ちょっと、気に入ったもので、図書室で借りたの」

「ぼくも、それ、借りたことあるんだ」

「ふうん」(知ってる。さっき見たから)

「いいよね、それ。ぼくも気に入ってる」

「へえ」(気が合う)。ちょっといい気分

「ねえ、帰るなら、一緒に帰ろうよ」

「うん」しかし、すぐに何に対して返事をしたのかに気付いた。「・・・んえ」驚いて変な声を出してしまった。大石は変な奴と思ったのか笑っていた。

(でも、考えて見れば、クラスメイトだし、たまたま帰る時間が同じになったわけだし、特別、変、ということもないか)

自転車置き場の前で待っていると、中から自転車を押して大石が出てきた。智美の前で止まり、おもむろに自分のバッグからタオルを取り出した。そして、それを後ろの荷台に置いた。

「はい」

どうも、そこに座れ、と言っているようだ。

「え、でも」

「大丈夫。今日、タオル使ってないから」

(いや、そういうことじゃなく・・・)

しかし、大石がせかすので、言うがままに座ってしまった。大石は智美の鞆と自分のバッグを器用に前のカゴ

にしまった。

「しっかりつかまって」

「うん」

滑らかに走り出した。智美は、すごいと思った。弟の利通を乗せて二人乗りしたことがあるが、走り出すときにグラついてバランスを崩してしまった。もちろん、パワーのある大石が、軽い智美を乗せるのとは訳が違う。比較すること自体が間違いと言えば間違いだ。

校門を出るところで、遠くに倉下桃子がいることに気付いた。向こうも智美に気付いたらしく手を振っていた。智美も手を振り返したが、バランスを崩しそうになり、慌てて大石にしがみついた。

^つづく<

テーマ競作詩 『祝』



テーマ競作詩『祝』

鎖につながれた猫

齊藤 聡

きたならしい鉛色の毛並みが

つながれてる

猫が

目やにがたまってる

猫が

つながれてる

紙飛行機ほどの自由もない

猫が

つながれてる

海の間ごつでは

何千人も餓死してる

地雷で爆死してる

通り魔は人を殺してる

引鉄はかなり軽い

僕らは猫よりも自由なんだろうか

つながれた猫が

もがいてる

猫が

鉛色の毛並みをしてる

猫が

もがいてる

ウサギは犬に
かみ殺されてる
実験材料にされてる
宗教は人を殺してる
人は合成されて生まれてる
遣伝子は投機の対象になってる
僕らは猫よりも賢いんだろうか

車に轢かれた猫が
もがきながら言ってた

生きろ

ぼくは生きる
君も生きろ

テーマ詩『祝』

月の上を歩く

入江 幼夢

青い青い空の下

陽炎の森を 歩いてた

広い広い砂の上

めまいを こらえて 歩いてた

風に 自重に 消えゆく足跡^{きみ}たち
わたしを恨んではいませんか？

碧^{あお}い碧^{あお}い空の下

端木を抱えて 泳いでた

茫^{ひろ}い茫^{ひろ}い水の上

沈まぬように 泳いでた

どこにも残らぬ足跡さんたち
わたしを恨んではいませんか？

いつたい どれだけ歩いたのだろう

五十歩くらいは 歩いただろうか

滄い滄いソラの下

ふわふわ ゆらゆら 歩いてた

漠い漠い砂の上

ふわふわ ゆらゆら 歩いてた

はつきり残った足跡さんたち
わたしを恨んではいませんか？

歩みを休めて振り返る
そこは足跡たちで賑わっている

足跡さんたち 喜んでいる？

足跡さんたち 怒っている？

足跡さんたち 泣いている？

足跡さんたち 楽しんでいる？

私は歩く まだまだ歩く

あなたたちの賑わいは

わたしへの祝いの言葉

いつか また 会いましょう

そのときは また

あなたたちの 祝いの言葉を聞かせてください

テーマ競作詩『祝』

ぎんのそら

糸のようなきらめきが
傷みかけた世界に降ってくる

朱い血のいろのような身体と
萎えきつたしろい草のような手足
TVの中も外もすべては
同じようになってしまった絶望は
深く

音のない叫びにあふれ
わたしたちに不平等にかかってくるものだ
深く
沈んでゆく
もつと深く……

天に昇るものはいるか

どぎつい色ばかりが増えてゆく
そして私たちの眼は色彩を失うかのように

吉村 千夜

瞳は細く
病んだ白目に囲まれて
手だけが伸びる
救いさえも待つことなしに

それが世界なのかと

けれど光が
どろどろに熱い熱い太陽からだけではない光が
きらきらと
きらきらと
世界に降ってくる

それはまるで穢れも恐れも知らぬ輝いた瞳
その奥深くに常に燃える輝きが…

わたしたちを祝福するかのように

救いたいのでもなく
情けをかけるのでもなく

ただ祝福を

ただ透明な祈りを

あのぎんいろのきらめきが
やがて世界を包むならば
その光が視えるならば…
ただ信じていられるだろう
わたしたちへのまだ消えぬ祝いの微笑みを

微笑む

橋本 さかえ

泣かなかったし、目も逸らさなかつた。
ただ、胸が少し、どきどきした。
もう、ずっと昔に忘れていたその笑顔を見て、
変だな、うれしかった。

元気？ だなんて陳腐な言葉でさえ、
今日はなんだか新鮮で、
もう、忘れていた癖さえ復活してた。

喧嘩しても

わがまま言っても

そばに居ても

遠くに去っても

あなたは、ずっと笑顔でいる。

馬鹿だったのはお互い様

私は、あなたを強い人だとおもっていた。

あなたは、あなたを騙していた。

よかったね。だなんて言うと思った？

まだ、好きだって言うと思っただけ？
走って逃げて行くと思っただけ？
目を逸らして、涙ぐむと思っただけ？

ほら、見てよ。
私を見てよ。

私、微笑んでいるでしょ。
私、微笑んでいるのよ。

これは、忘れていた悪い癖。
私は、強がり。
私は、負けず嫌い。
私は、大人の女。

そうよ。こんな私をもう解放して。
早く、立ち去って。

十年経ったら、言わせてもらおうわ。
だから。

テーマ競作詩 「祝」

旅立ち

赤石 梢

今日は祝いの日。

誕生を祝う。

ある者は喜び、ある者は戸惑う。

今日は祝いの日。

旅立ちを祝う。

ある者は泣き、ある者は励ます。

今日は祝いの日。

帰還を祝う。

ある者は喜び、ある者は疎む。

今日は祝いの日。

魂の解放を祝う。

ある者は泣き、ある者はうめき、ある者は笑う。

今日は祝いの日。

滅亡を祝う。

……。

ジャンル指定
『恋愛もの』
(人間どうしの恋愛もの)



ジャンル指定『恋愛もの』

あつくんが死んだ日

齊藤聡

関東地方が超巨大地震に見舞われた日、あつくんは死んだ。

死体は帰ってこなかった。遺品もなかった。

あの日あの時、あつくんは大田区のオフィスから都心の客先へ向かっていたそう。

「いま地下鉄に乗るところなのですが、ちょっと遅れそうです。申し訳ないのですが」という電話を最後にあつくんの消息は分かっていない。

あたしはその地震のとき、仕事中だった。大きなスーパーマーケットの中のゲームセンターの店員をしていた。頑丈な建物の中にいられたのは幸運だったかも。街中のちっぽけなゲームセンターの店員だったら、死んでいたかもしれない。あたしがいたのは埼玉だったけど、それなりに激震だったのだ。

事務室に景品を取りにいっただらぐらうとききた。あたし

はとつさに机の中にもぐりこんだ。電気がぱちぱちとはぜて消え、机の上で何度もガラスの砕ける音がした。月並みな表現だけど、生きた心地はしなかったわね。揺れが永遠に続くんじやないかと思っただし、そのあいだ頭を両手で覆って丸くなっていた。

揺れがおさまってもあたしは生きていた。それで机の下から這い出し、手探りで事務室を出た。スーパーマーケットの中は窓がなく、真っ暗闇だ。

手探りで机から這い出し店内に出たところで、あたしはオレンジ色の光に照らされた。

それは時計売り場のコの懐中電灯だった。彼女はあたしの腕を引っ張った。

「あつちにみんな避難しているから」いつもはぼーっとしているコなのに、いまは別人のように見えた。

「う、うん」あたしはうなづいてよろよろと歩きだす。

真つ赤な非常灯がぼんやりと通路を照らしていた。隣のCD売り場のポスターがぼんやりと見える。店内はほこりっぽかった。舌がざらついていたし、コンタクトレンズが痛かった。

警備員の一人があたしの手を引いた。

「こつちだ」非常出口を指差す。

あたしはそれに頷いてよろよろと緑色の照明がまぶしい非常出口に出た。

あれから五年経った。あたしはまだ親元にいる。三重県は気候がよくて住みやすい。自動車が発動できれば便利でもある。少なくとも地下鉄に乗らずにすむのがよい。

あの地震で都心の地下鉄はすべて陥没した。ほとんどの地下鉄は巨大地震を考えて設定されていたのだと思う。でもあれは巨大地震じゃなかった。超巨大地震だった。

あつくんはそのどこかでつぶれてしまったのだろう、と言われている。あたしは信じていないけど。あの地震で首都機能は完全に停止し、政府はこれを幸いにさつさと遷都してしまった。もちろん復興は行われたけど、ほとんどの地下鉄はつぶれたまま。もともと赤字だったしね、地下鉄なんて。だから再建する意欲が沸かないんだわ。

被災者の救助なんのできる状況ではなかったし、ましてや地下鉄を掘り起こして、遺体探しなんてやるわけがない。

だからあたしにはあつくんの遺品は届かなかった。会社の私物はダンボールひと箱に入れられて送られてきた。

あたしの写真と彼が使っていたボールペンと印鑑、ゴルフボール、サンダル、雑誌が二〇冊くらい……。バザーでもやるみたいになそれを床に並べて、いまも並べてある。表面には埃が積もっている。雑誌はすいぶん日に焼けた。あつくんはいまどこに居るのだろう。寒くないかな。寒さなんか感じないわね、もう。

その知らせはなんの前触れもなくやってきた。

昨年からはまった首都圏復興計画の一環として地下鉄の再建工事が始まった矢先のこと、あたし宛に一枚の封書が舞い込んだのだった。

「遺品の……」

あたしはその週の予定を全てキャンセルして、東京へ向かった。

「こちらです」

係員がテーブルの上に置いたそれはビニール袋に包まれた鉛色のかたまりだった。

「ええと、灰色のシヨルダーバッグですね」

「はあ……」

あたしは実感なさそうな顔をしていたに違いない。

「こころあたりありませんか？」

「いえ、そういうわけでは……」

灰色のシヨルダーバッグはあたしとおそろいで買ったものだ。あつくんが死んでから使っていないけど。

「あらためていただけますか？」

「はい」

あたしは丁寧にビニール袋のシール部分をあけた。湿った土のおいがする。あたしはすぐに鞆のジツパーの近くが乱雑に切り開かれていることに気付いた。あたしの中で陰鬱な怒りが渦巻く。

「遺品の所有者を特定するためにやむを得ず中身を確認しています。ファスナーがさびついていて開かなかったので、切り開くしかありませんでした」

「はあ」

係員が釈明するのをあいまいな返事で受け流す。

すでに中身は雑然と詰め込まれていた。鞆の仕切りやポケットに関係なく、ものが入っていた。その入れ方に彼のおいはない。すでに盗掘された遺跡を見つけた発掘隊のような気分だ。

黒い合成革の名刺入れが出てきた。それから何かのメーカー名の入ったボールペン。自宅の鍵（いまは自宅で

も何でもないが）、すでに中身のない目薬、ピンク色の携帯ゲーム機、五年前のコンピュータ雑誌、電子手帳、いつも使っていた財布、単三電池、三文判、お守り……。

あたしは確かに間違いないと、言った。係員はすぐに書類に印鑑をと言い、そしてあつくんの遺品はすべてにあたしのもとに戻ってきたのだった。

こうして、あたしの部屋の床面積はさらに浪費されることになった。泥まみれの鞆はそのまま並べられ、その内容物も同じように並べられた。すこしばかりまわりの畳が砂っぽくなったかもしれない。もつともどうでもいいことなのだけどね。

妹は「いいかげんに目を覚ましなよ」って言うし、あたしもその通りだと思う。でもまだあたしは思い切れない。あつくんの遺品を並べ、その死を実感しようとしているけれども、まだだめなのだ。

極端な話、これからずっと、弥勒菩薩が降臨されるまでだめかもしれない。あるいは一分後には実感できているかもしれない。つまり……

あたしには分からないのだ。

「あつくん、来たよ」

命日のいつもの行為。これで五回目か。

墓石はスタンダードな直方体。黒色のつやっぴいやつ。ゴキブリ色っぽくてあたしは嫌いだ。

そもそもこの石の下にはあつくんのかげらすら安置されていなくて、毎年年お参りに来るなんてばかげた話だ。彼の先祖の骨壺以外には、その中には彼のために坊主がうやうやしく書いたお札が入っているだけなのに。あたしの部屋一面に広げたあつくんの遺品に頭を垂れているほつがよっぽどマシというものだ。まあいいけど、あちらのご両親にも不義理をするわけにはいかないし。気分転換にはちよつどいい行事かもしれないしね。

「生きているかもしれないのにね」

義理の母の毎年の台詞。彼女はいつかあつくんが「ただいま」って帰ってくることを信じているようだった。地震のために記憶を失い、それでまだ帰ってこないと思っっている。そんなことって……あるだろうか。

お線香の煙がたなびいていた。あたしはこのお墓には入らないかもしれない。そんなことを漠然と考えていた。「お母さん、先日掘り出された遺品を受け取りに行ってくださいましたの」

「ええっ?」

あたしはこのオーバーな反応が嫌いだっただ。

「今日は持つてきませんでしたけど、お墓に入れたほうがよろしいかしら?」

義理の母は頬に手を当てて考えていた。

「それは……いいのよ。あなたが持つているほうがいいわ。それにあの子は生きているのかもしれないし」

「そうですか」

あなたに渡すものか。あたしのものだ。誰にも渡すものか。

あつくんは言っていた。自分が死んだらあたしの右肩に乗る、と。ずっと乗っている、と。あたしはあつくんが死んでから右肩に違和感を感じてはいない。重さも感じていない。何も感じていない。臨終の人の体重を量つたら軽くなったという話を聞いたことがある。その差が靈魂の重さだと。あたしはその重さを右肩に感じているだろうか?

少なくとも従兄弟の結婚式の集合写真には映らなかった。声優仲間と行ったカラオケのふざけた写真には写らなかった。父親のデジタルカメラにも写らなかった。な

んにも写らなかつた。

あたしは靈魂の存在も言霊も信じているんだけど、自分自信でそういう現象を体験したことはない。二〇歳を過ぎてそういう現象に遭遇しないと死ぬまでない、なんて言うけど本当だろうか。二〇歳というのが十進法の二〇歳なら、もうあたしがそういう現象に出くわすことはないわね。

神様は人間の年齢を十進法で数えるんだろうか……それとも二進法？ 少なくともあつくんはヘキサダワね。なら、あたしが十進法で三三歳になるまでにはきつとあつくんは出てきてくれるかもしれない。

それはくすんだピンク色の携帯ゲーム機だった。もともとは中身が透けて見えるような筐体だったのだが、埋もれている間にすっかりくすんでいた。ボタンは砂っぽく、電池は液漏れしていたが、画面にはほとんど傷はなく、電池を換えれば動きそうだった。

実際にあたしは電池を交換して、スイッチを入れてみた。

画面は鉛色のまま変わらない。

「ふん」

あたしはそれを床に放り投げた。分かっていたことだけどそんなもんよね。

これが動いて、あつくんの魂がその中に……ふん、エスエフじゃあるまいし。

そもそも人の心を入れておくにはこれは小さすぎるし、賞禄がなさすぎる。しょせんゲームなのだ。

じゃああつくんが部品を集めて作ったPCはどうだろう。だけど、それだつて家具や家電製品と変わるところはない。所有者の色は感じられてくるかもしれないけれど、だからつてそれがその人の変わりになるわけじゃない。

あつくんは何も残さなかつた。何も残さずに一人で逝つてしまった。

遺体も残さなかつた。骨も拾わせてくれなかつた。棺を花でいっぱいにもさせてくれなかつた。ただ無意味なお経とお墓参りだけだ。

わずかな電子メールを繰り返し読み、何枚かの写真を何度も何度も見て、旅行のビデオを流し、電話の留守録を聞きなおす。あつくんを再び感じるにはそれしかない。それだけしかない。

もう一度あつくんと話がしたい。

テーマジャンル「恋愛もの（人間同士）」

結婚

赤石 梢

下を向いてテーブルの上を見つめていた女が、下を向いたまま小さな声で話し始めた。

「ごめんなさい。貴方は好きよ。たぶん、愛してる。

でも、結婚してやって行ける自信がないの……。」

「他に好きな人でもいるの？」

「違うわ。そんなこと……。」女が涙ぐんだ、

「ごめん……。」

でも結局、結婚する程、愛していた訳じゃないってこ

となんだね……。」

「ごめんなさい……。」

女は、バッグを掴むとそのまま店を出て行った。

男は、呆然とテーブル上の指輪を眺めていた。

（またか……。）

男は、溜息をついた。

（まただ……。結婚する程愛していない。どれほど愛せば、結婚する程なんだろ(??)）

男は、別に取り立てて顔が悪い訳でも、性格が悪い訳でもなかった……。むしろ、顔も平均よりはいいし、性格だって特に男らしいわけでもなかったが、平均並だった。なのに、男はこれで3人の女に結婚を申し込んで、断られていた。決して、結婚するだけの為に付き合ったのではなく、好きになってそれなりのつきあいをした上で、結婚を申し込んだ。それなのに……。

（インパクトや決め手がないってことなのか……。）

十人並みの男とは、結婚する気も起きないってことが……。）

確かに、男の周囲でも結婚している男女は、少なくなってきた。しかし、それは男が歳を取ってきたから、周囲にそういう人間が減ってきたという所為だと思っただ。同期入社の男子の半分は結婚している。半分は多いのか、少ないのか。ランクという考え方は好きではないが、自分より上だと思えない奴でも、結婚している奴はいる。確かに、いい奴なのに結婚してない奴もいる。なのに……。

そして、ある喫茶店のあるテーブルで……。

「確かに君の事は好きだ。愛してると思う。でも、まだ結婚するのは、早いと思うんだ。」

(付き合つて五年……。それは、まだ結婚には十分ではないの……。)

「さよなら。」

女は、顔をあげ男の顔を見て、言った。

「え？」

女は、それ以上は言わずに席を立った。男は、ホッとした様な少し残念そうな顔をして女の背中を見送つたが、追いかけては行かなかつた。

別れを言つて外に出たものの、女はどこへ行けばいいかわからなかつた。一人で泣きたい気もしたし、一人ではなんかいたくない気もした。誰かに話を聞いて欲しかったが、親友はすでに結婚してしまつていて、気持ちをわかってくれそうもなかつた。

女は、駅の方に向かつて目的もなくゆっくりと歩いていった。

呆然としていた男は、ようやく立ち上がった。

このままここに座つていてもしょうがない。それに、周り中の人間が自分を笑つて居る様な気がして、ここからできるだけ離れたかつた。

思い詰める様に早足で歩く背の高い男は、前をちゃんと見ていなかった。

行く場所を決められなくて、何処へ行こうか迷いながら歩いている小柄な女は、空を見上げて立ち止まつた。恋人がいらないからと言って、すべてが失われた訳じゃない。確かに、結婚した友達は、昔のように一緒に遊ぶ訳にはいかない。でも、どこかに一緒に遊んでくれる人もいるはずだ。別に恋人でなくてもいい。この気持ちをわかってくれるひと人間がどこかにいるはず……。

そして、運命はかくも容易に二人をぶつめた。

「！」

男は、立ち止まつた女にぶつかつてしまった。

「す、すみません。ちゃんと前を見てなくて。」

「私こそ、急に立ち止まつたりしたから。」

すみません。」

男は、女の目が少し赤いのに気づいた。

「大丈夫ですか？ 怪我でも……。」

女は、泣いていたことを気づかれて、ちょっとあわてて言った。

「いえ、大丈夫です。これは、ちょっと……。」

いつもなら、こんなことで女を誘ったりなどしない男は、さっきの反動で少し自棄になって大胆になっていた。

「お詫びにどこかでお茶でも飲んで行きませんか？」

僕、さっき振られたばかりなんですが。」

振られたばかり……。

それを聞いて、女も探していたものを見つけた様な気がして頷いていた。

「実は、私もさっき別れたばかりなんです。ついその喫茶店で、五年付き合ったひと男性と……。」

そろそろ結婚しない？ って言ったら、まだ早過ぎるって言われて……。

結局、私と結婚する気はないんだなって思えて……、きつと私もそこまで愛してなかったのか、そこでさよなら

言っちゃったんで、おあいこかもしれませんけど。」

気がつくくと、彼女は男に自分のことを笑いながら話していた。

なんだか、男が自分を優しい目で見ている様な気がして……。

彼女の話を書きながら黙って聞いて、彼女の気が落ち着いてのを見届けてから、男は言った。

「僕の話も聞いてくれますか？」

そうして、彼らはお互いに身の上話を終えた。

「生物学的にみても、確かに環境ホルモンによって動物の生殖能力は、衰えつつある。」

もしかしたら人間にも、それは広まっているのかもしれない。確かに、人間の精子の数もわずか何十年かの間に、何分の一にまで減ってきているらしい。」

彼は、生物学者だった。

「社会的にみても、大規模災害の影響や、少子化の影響、また犯罪の低年齢化によって、生殖に適した男女が減ってきているのは確かね。」

彼女は、社会学を専攻していた。

二人はそれぞれの分野で、資料を集めた。

環境問題は、現在もっとも注目されている問題でもあるので、資料は膨大な数にのぼった。しかし、彼らは仕事でもないのに、その収集分析作業を続けた。

自分の振られた訳を正当化したかったのかもしれないし、自分の存在を正当化したかったのかもしれない。

調べあげた内容をお互いに持ち寄り、始めは毎週、そのうち毎日の様に話しあった。

お互いが必要とするのはすでに当然のことであつたが、振られたもの同士ということが、彼らに一步を踏み出させずにいた。

そして、彼らは確信していた。

人間の衰退が避けられないものであること……。

それは、そんなに遠い未来ではなく、そんなに近い未来でもなかった。

結婚件数の減少・少子化……。

それらは、人間の滅亡への前触れに過ぎなかった。

人間の種としての生命力が、衰退しているのだ。

人間は、戦争がなくても滅びるだろう。自らが作り出した環境によって。

もしかしたら、人間が自らの未来を信じられなくなって、自らの未来を終わらせれる事を望んでいるのかもしれない。

人間の恋愛というものが、生殖の行為から切り離されて久しい。しかし、それは人間の持つある種の知能と生命力の産物だった。

生命力の衰退し始めた今、結婚という社会制度が子供と生み育てるものという大方の認識と共に、結婚は成立し難くなっているのかもしれない。

若さに任せて勢いや見栄での成立はあつても、成熟し現実を直視した時に、『結婚≠生殖（繁殖）』という図式は、生命力の衰退した種には、重いものになりつつあるのかもしれない。

先進諸国の何秒に一組という離婚率は、成熟した後、それに耐えきれずに破滅しているという証拠かもしれない。

未来がないのと確信しているのに、未来を育むことができるのか……。

結婚の意味とは……。

彼らがその後どうしたかは、わからない。

はかない 淋しい 焼けつく様な
それでも恋とはちがひます
サントマリア
ちがひます ちがひます
何がどうかはもとより知らねど
いやなんです
あなたがいつてしまうのが

サントマリア

橋本 さかえ

光太郎は、ほとんど物音も立てず、薄暗い一階のアトリエに隠っている。私は二階で絵筆を持つ。汚れるからと着替えたいセーターとズボンの姿は、今日も汚れることもないだろう。白いキャンパスはそのまま。用意した林檎はもう醜い皺が寄っている。林檎を並べてもう何日が経っただろう。何日見つめていたのだろう。林檎は買ってきたその日に食べてしまふべきであった。私に見つめられ、ただ、本来の意味であった「食用」の人生を全う出来ず、林檎はただ時間と共に老いていく。

ああ、今日はなんて寒いのだろう。
外は、しんとしている。

この家もしんとしている。
私しかないように、この狭い世界に、私しかない。光太郎は淋しくないのだ。私がいるから。でも、私は淋しい。どうしてだろう。

手の中で鈍い音がした。絵筆の艶やかな茶色の柄に白い罫が入って、ああ、私の持ち物は、なんて果無く華奢なのだろう。私の体や心までが、弱々しく力なく。

光太郎。あなたが恋してくれかけた頃の智恵子にはコウコウとしたスポットライトのような未来がありました。着流した着物の襟元は新しい時代の女を意識して空に向かつてすうっと首が伸びていました私は光太郎、あなたと知り合えたことが幸せでした。そして、あなたの涼し気な視線の内にあることが、あなたの理想の女であることが誇りでした。

ああ、でもわたしのあなたが誉め称えてくれた才能は真実ではなかったのです。

どうしてもこの林檎の赤が分からない。なぜ、林檎は赤で有るべきなのでしょう。なぜ、私がこれを赤だと表現出来る才能がないのでしょうか。

部屋の四隅が暗い。太陽の下で腕を伸ばしたい。

梅の実を、綺麗にふきんで拭く。あなたがうれしそうな顔でやってきました。今年も梅酒を漬けます。もう去年のが美味しくなっていますよ。お夕飯のときに出しましょう。

今日、蛭を買いました。今年、初めての蛭ですよ。そうして、お財布の中身は五銭と少し。ねえ、光太郎さん、もうすぐお米もなくなります。だから、今日は早く帰ってらっしゃいよ。そんなつまらない寄り合いなんか早々に抜け出して、うちであつたかい蛭汁と今朝の残った御飯を食べましょう。ほら、こんなところに海苔がある。これも火でぱりぱりと焙って、おしょうゆ付けて食べましょう。

おかしいですね。あなた、私を笑って下さい。

まだあなたが出掛けて半刻にもならないのに、もう、あなたが恋しくて、淋しいのです。

ああ、私は子供のようです。

あらあら、あなたつたら酷い人。

智恵さんはどンドン綺麗になるね、なんて、真顔で言うんですもの。どきどきしました。セーターとズボンがそれほど好きなら夏もこの格好でいましょうか、と言ったらあなたは笑いましたね。

では、私は言いません。

あなたは、年々、素敵になっていきますのね。

最近、夢を見るのです。

しばらく帰っていないからでしょうか。

私は、そよそよと風を感じながら、野原に寝転がっています。そして、雲が流れる高くて青い空を見えています。そこは阿多田羅山の見える空です。

東京には空が有りませんのね。あなただったらびっくりして空を見上げて。ご免なさいね。私って言葉足らずね。あなたと話しているとどうしても無口になってしまうのです。

あなたはわたしが求めた空を説明するとにこやかな声で言いました。

智恵さんは本当にあどけない人ですね。

そうかしら。

ええ、あどけない人です。

わたしはあなたから目を逸らし、あなたの空を見上げました。そこにはぼんやりとした春の空がありました。やはり私の記憶の奥、絵のように鮮やかな空ではありません。

ええ、そうね。

あなたは私の横で同じように空を見上げました。私の視界にあなたの尖った顎がぼんやりと見えます。私は少し心が痛かった。あなたをあどけないという言葉は私の中で頼り無いという言葉に換りました。

そう、分かっている。それはあなたの誉め言葉だと知っている。ああ、だけど、私の心はちくちくと痛むのです。

私はあなたと同じく年はとっていくのに、心の中は子供のままなのです。だから、あなたはあどけないなどと言って

私を許しているのですね。

ええ、そうね。あなたの尖った顎を見ながらこんなことを考えている私はやはり子供です。

カタン、トトン。カタン、トトン。トンカラ機を織る。

庭にはトマト。瓜が大きい。

とても穏やか。とても平和。

後で庭の露草を写生しよう。

いらつしやい。あなたは本当に光太郎と仲がいいのですね。

Kさんの大きな笑い声が聞こえてきます。一体何がおもしろいのでしょうか。光太郎の椅子の位置を直す音が床に響いて聞こえてきました。また、きつと身を乗り出しているのです。うね。

やかんがシンシン言いました。南部鉄瓶にお湯を入れましょう。そして、そつとドアを開けましょう。

光太郎とあなたの場を乱さないように。

もう、私の帰る家はここしかありません。

あなたにどうやって説明したらいいのでしょうか。

そうね。あなたはなんとなく分かっているみたい。

私の実家はとうとう破産しました。

だから、私の家はここだけなのです。

それでもあなたは私を好いてくれますか。

ああ、何故でしょう。悲しいのに、とても胸がドキドキし

て苦しいのに、ワタシの顔はとても無表情なのです。鏡の中で今日私は死んでしまいました。

あなたは、それでも私を、愛してくれますか。

ああ、どうぞ、これ以上、私を死なせたくないと考えてくれるならば、何も言わず私の手を握っていてください。

今日は、昨日より気分がいいのですよ。

さつき、先生がいらいちゃって、もう一週間様子をみて調子がいいようなら退院出来ますよ、そうおしゃってくださいました。看護婦さんも、良かったですね、そう笑ってくださいました。あなた、喜んでくれる人が一人でも多いということは嬉しいことですね。面会時間まであと一時間、私はあなたに早くこのことを伝えたくて、またドキドキしています。

あなたはきつと喜んでくれますよね。

こんなに長く家を空けてしまつてご免なさい。昨日、お義母さまがお見舞いに来て下さつたのよ。青いすっぱいおみかんを持ってきてくださつて。二人で、すっぱいすっぱいと言つて、食べました。お義母さま、私がおみかん好きだつて覚えていて下さつたの。家の事は心配しないでちゃんと直しなさいね。そう、帰る時におっしゃつて下さつたのよ。光太郎のことは任せておきなさいね。私は感謝しました。でも、少し心が痛みました。孫も抱かせてあげられない、夫の面倒も満足に出来ない不出来な嫁に、お義母さまは落胆なさつていらつしやるのでしょね。私は黙つて頭を下げることにしか出来ないのです。

でも、こんなこと、あなたには言えません。

今度は、あなたの心が淋しくなつてしまうもの。

もうすぐ時間かしら。あら、まだまだですね。

早く、あなたに伝えたいのに。

今日は、本当に気分がいいのです。

窓から見える空も綺麗です。

まだ、あなたは帰つてこない。私を一人にして、どこかで絵を描いている。私は薄暗い部屋の中、一人分の夕飯を用意した。もう、あなたが旅に出て半月が経ちました。もう半月も一人で待つのはたくさんです。帰ってくるのかと不安になります。私はこのままあなたに会えなかつたら、きつと死んでしまう。歳をとらないと言われた智恵子は、ここ半月でどんどん歳を取り、皺が増え、醜くなりました。

この三日間、鏡を見ていません。

お義母さまが、心配顔で見に来ます。でも、たいしたお愛想もできません。つい、あたしは死ぬわ、そう口走つていました。明日から姪が泊まりに来ます。私が自殺するとても、思っているのかしら。まるで囚人です。東京の空に囲まれたアトリエの孤独な囚人だ。

光太郎さん、光太郎、光太郎さん、光太郎。咳いたあなたの名前はあなたのいないアトリエの、電気の光の当たらない部屋の四隅に散つていく。

私は独り。

気が付くと光太郎の姿を探している。

気が付くと光太郎の姿を追っている。

最近、私は子供のようだ。

あなたに笑われても仕方ないですね。

Kさんがいらっしやったので、お雑煮を作りました。あなたが台所に来て、智恵さんも一緒に食べようと言いました。今年初めての幸せです。

Kさんは楽しい人です。あなたも私も笑います。私もKさんのようにおしゃべりが出来たら、あなたはこんなに笑ってくれたでしょうね。

Kさんが今年もよろしくと言いました。あなたはKさんに手を振りました。私も手を振りました。本当に良い人ですね。

また、春です。

庭の桜が咲きました。

今年はロスアンゼルスというところでオリンピックがあるんですね。どんなことをするのでしょうか。あなたにそう聞いたら、楽しそうに話してくれましたが、私にはよくわかりませんでした。

少し、頭が痛いけど黙っていた。

今日は暑いね、あなたがそう言ったのに私は黙っていた。あなたが心配そうに私を覗き込んでいたのをなんとなく知っていたけど、私はその時他のものを見ていた。

なんて説明したらいいのでしょうか。

私の好きなセザンヌの色がその時私の足元で渦巻いていたのを、あなたは気付いていないのでしょうか。だから、あなたには説明出来ないのです。

親愛なる高村光太郎様。

あなたはこんな私をとて愛してくれました。

私はそれだけで幸せでした。私はあなたに愛されるだけの価値を持った女になりたかった。誰からも好かれ、あなたの自慢になる、そんな女になりたかった。

それは所詮無理な話でした。私は臆病な何の取り柄もない女として、今、一生を終えようとしている。

でも、信じてください。私はあなただけを愛していました。あなたなしでは生きていられませんでした。

でも、あなた、許して下さい。私のなかの何かがあなたと私の確かだった生活を乱そうとしているのです。

ですから、もう、他にそれを正す方法を見つけれませんでした。たった一つしか、私には見つけれませんでした。

私は、あなたを愛していたと、ただそれだけは信じてください。あなたは私の大切な人でした。あなたが私を変わず愛してくれたことに感謝しています。

お父様、不甲斐無い娘だとお怒りでしょうが、お許しください。

昭和七年七月十五日

智恵子

白い壁。目を覚ました私にあなたは、良かったと泣き崩れた。私はただぼんやりと死ぬことも許されなかつたと、そう知った。

ならば、もう、死は選べまい。

ただ、今は眠いだけ。

あなたの震える手を、感じながら私は目を閉じた。

病院を出ると何となく風が涼しくなっていた。それでも日向の温度は高く、少し歩くと汗ばんでくる。今日は気分良いのかい。あなたが私に声を懸ける。私は頷く。あなたは私をいつも見ている。私はいつもあなたの視線を感じている。

私は少し辛くなった。

私は、少し、辛く、なつた。

あなた、とてもきれいなよ。最初は丸。それから鳥になつたりして、くるくる私の周りをくるくる、くるくる。

それが、とてもきれいなよ。

あなた、とてもきれいなよ。

汽車の中、あなたの目が笑っている。あなた、外見てくださいな。山があんなに真っ赤。もうすぐ着きますか。いい所ですね。清々しくて、私はうきうきしてきました。もう、私は元気ですよ。足を伸ばして私の実家に寄りましょう。みんな、私達の事を喜んで迎えてくれるわ。そんな心配そうな顔

しなくてもいいじゃないですか。二人で行くなんて久振りですもの。ねえ、行きましようよ。

私の話からあなたは目を逸らし、私は気付き目を伏せた。

東京は嫌い。なのに、ここにしか帰る場所はないのです。上野は人がいっぱいです。皆が上野に集まるのですね。私の知らない人たちがばかり。そんなに私の手を引つ張らなくても私はちゃんと歩いていきます。あなた、帰ったら私の手帳を見てください。あなたが汽車の中でうつらうつらしている時に、又美しいものを見ました。それをスケッチしました。そんなに強く手をひかなくても大丈夫。私はちゃんと歩いていきます。

これは月、そして、星。綺麗な着物を着た女の人が優雅に踊っていました。こんなに寒いのにさつき、桜が散っていました。

こうだろう。

こんな、くすり、きらい。あなた、ここは、こんなに、うみが、ちかい。ちどりが、わたしの、なまえを、よぶので、ちえこは、ちえこの、なまえを、わすれない。

あなたが毎日ここにいればいいのに。

ここは九十九里浜。東京にいるあなたはとても遠い。週に一度、あなたは私を思い出すと会いに来る。あなたが会いに

千鳥は、あなたの名前を知らないから、あなたの名前を呼ばない。

光太郎、光太郎、光太郎、光太郎。私はあなたの名前を呼ぶ。

私は、千鳥の声を聞く。私は光太郎と千鳥になる。

お客さんだ。

アトリエのドアを開ける。挨拶がわからない。知っている人だ。ああ、なんて面白い顔をしているのだろう。そんな大きな目をして、口をあぐり開けて。光太郎が振り向き、立ち上がる。そんな困った顔に私は声も出せない。あなたも面白い顔をすればいいのに。そうすれば私は笑えたのに。目が覚めたのかい。なんですって。

あなたは、私にそう尋ね、優しくドアの外に追いやった。

智恵さん。駄目だ。止めるんだ。

私は手の平の痛みに目が覚める。

たった、一つになった鏡は光のかけらになって、その存在を異なる世界に移していた。

また、世界が白くなる。色のない人たちが光太郎に混じって私を押し込め込む。ああ、あなた、私を助けて。私を解き放つて、一緒に帰りましょう。それが叶うのならば、私はこの白い世界を撃ち破るために力の限り叫びましょう。

だから、私を解き放つて。

赤。青。黄色。緑。鶴が舞う。

とても、綺麗。

これは鶴。これは奴っこ。これは、紙灯ろう。

私はあなたに見せる。あなたは、ほうと溜息を付く。

私はそれがうれしい。

智恵さん、すごいね。すごいよ。綺麗だね。

あなたはそう言つて私をうれしがらせました。あなたの手の中で赤い花が揺れました。私は、笑いたくなって、恥ずかしくなって、照れました。私はあなたに賞をもらいました。

朝御飯を食べたら、わたしには神聖な仕事がありますから、静かにしててください。これは、光太郎さんに見てもらうのだから、あなたは見ないで。私は白い人に叫びます。光太郎さん、私は、あなたの価値を知っている。あなたは私の価値を再認識した。私はあなたを愛している。

早く、私を連れて帰りましょう。

見て下さい。こんなに綺麗な赤い動物がわたしの手の中から生まれました。智恵さん、これは蟹ですね。私は嬉しくてはいとお辞儀しました。生き生きしているそれはあなたの中で動いています。あなたは私の手を握って、智恵さんは本当

にすごいですね、そう、言いました。私はまたお辞儀しました。あなたはやがて手を叩きました。私はいつもの時間が来たことを知りました。

私の顔がぴくぴく動きます。あなたは、微かに笑って又明日ね、そう言います。いやです。いやです。

私も帰る。私も、行きます。駄目だよ、智恵さん。あなたは、私から目を逸らし、愛用のハットを被りました。私はあなたに駆け寄りますが、あなたはもうドアの外。私はそれが淋しいのです。どうして私をひとりにするのですか。

智恵さん、また、明日だよ。

私は後も追えず、泣きます。

私の胸の奥、ざあざあと波の音。

もうすぐ、私は万物の生まれ、旅立つたあの優しく鈍く光る海に帰るのだ。私の吐く息は熱風のように。私の最後のエンジェルギーが最後の力を振り絞る。

ああ、なんて皮肉なことだろう。こんなときに私の頭はやけに冷静で、あなたに残せるものを考える。

私は引き出しの中の切り絵を、はる子に出して貰いました。そして、丁寧に包んで貰いました。枕元のそれは私の残した作品です。私は弱い人間でした。たった一回、他人に認められなかった。それだけで、絵筆を持つことに恐れを抱きました。私はあなたを尊敬します。強いあなたを信頼しています。

ああ、あなた。私は包みを渡すと嬉しくなりました。

智恵さん、これを。あなたは私にそれを握らせました。それは黄色い光。冷たい感触が指先から体と流れていきます。レモンですね。私はその微かな香りを鼻から吸い込み、そし

て、歯を立てました。すると、その爽やかな香りがあなたを驚かせ、私を私に、戻しました。

私はあなたを見つめ、あなたに頷き、深くその香りを全て吸い込みました。私に微笑むあなたが好きです。私はあなたがあなたで在ったことに感謝します。

そして、私は、あなたの妻であったことを思い出しました。それは、幸運でした。

わたしは、

智恵さん。

はい。

智恵さん。

テーマジャンル『恋愛もの』

selfish × selfish

霜越邦彦

腕時計を見てみた。並河茜のマンションへ行くための地下鉄には、まだギリギリ間に合う時間だった。永一が茜のマンションに行くのは二年半ぶりだ。本当は、もう行きたくないと思っていた。ことの起りは、携帯にかかってきた彼女からの電話だった。様子がおかしなく、いつもの傲慢な彼女とは違った。

・・・ちつ、携帯、教えなけりやよかった・・・

並河茜は、高校時代の先輩であり、現在、大学の写真部の先輩でもある。年は二つ上だ。永一は一年、彼女は三年だ。彼女とは高校一年の夏に体の関係を持った。そして、その関係は茜が卒業する翌年三月まで続いた。彼女との関係は、体の関係があったと言っても、恋人というわけではなかった。会えなくなったそこで、終わっていた。

永一は、できるならこの過去を捨てたかった。誘われ

るまま誘うまま中毒のように繰り返したSEXだった。思い出したくない。望んでいた関係ではなかった。地下鉄の入口に近い所で携帯の着メロが鳴った。

・・・茜か・・・

違った。茜ではなかった。別の女の声。

「あ、部長ですか」

聞き覚えがある。高校時代の写真部、一つ下の後輩だ。悩み事を聞いたり、カメラを選ぶのを手伝ったり、撮影テクニクを教えたり、バイトを紹介したり、と、後輩の中では特に面倒を見てやった娘だ。そのせいか、この娘から見ると、永一は「良い先輩」というように映っているようだった。

「木原か、久しぶりだな。その部長つてのやめろよ、もうとっくに卒業したんだからさ」

「ああ、そうですねえ、・・・じゃ、ただ先輩」

「うーん、まあ、いいよ、何」

「はあ、・・・特に用事という程では・・・」

「そう、・・・なら、ちょっとごめん、これから地下鉄に乗るところなんだ、かけなおしてくれるかな」

「ああ、・・・そうですか、すみません、また」

永一は携帯を切って地下に入った。

ホームに出ると、滑り込んできた電車に乗った。シートに座り、目を閉じると茜のことを考えた。考えてるうち、無意識に初めて関係を持つてしまったときのことを思い出していた。

その頃の永一は自信過剰であった。自己中心的な子供であったと思う。今も自己中心的が変わったわけではないが特にひどかった。うまく写真が撮れなければカメラのせいにし、投げて壊したこともある。だから、その「自信」が壊れたときは、ひどく脆かった。

小さい頃から写真を撮っている永一は、一年生にして写真部で最も撮影がうまかった。部長であった茜よりも明らかにうまかった。茜は美人だが、えばっていて傲慢に見えた。永一は、いつかその鼻をへし折って、犯してやるつか、そんなふうに思っていた。

まったく考えていることが子供だ。
しかし高い鼻をへし折られたのは自分の方だった。

三年前。

写真部では年に何回か展示会を開くのだが、そこで永一の敗北が明らかになった。確かに永一の写真は、誰の写真よりも綺麗だったが、誰もが少し見ただけで通り過

ぎていく、その程度のものだった。それに引き換え茜の写真は誰もが立ち止まって見ていった。それは精悍な危うい目をした男」の写真だった。露出、フレイミングなど永一に言わせれば中途半端な写真だったが、誰もが気を取られてしまう魅力を持ったものだった。

永一のプライドはひどく傷付けられた。自分は、ばかにしていた茜の足元にも及ばなかったのだ。胸が苦しくなった。自分のどこかのネジが緩む。足元の土台にひびの入る音が聞こえた。

・・・自分が今まで撮っていたものは、一体・・・
何故、茜の写真には人が集まるのか尋ねてみた。茜は、そんなこともわからないのか、という見下した表情をし、何も言わず去ろうとしたが、そこで何か思いついたのか、手帳を取り出した。そして住所を書いてそのページを破り取った。

「知りたかったら、うちに来な」
メモを押し付けるように永一に渡した。

茜の住むマンションは都心にある。高級そうなマンションだ。予鈴を押しすとまもなくドアが開いた。茜だ。Tシャツにショートパンツという格好をしている。ブラジャーはしていないようだった。永一は一瞬胸の方に視線

を奪われたが、すぐに逸らした。

「ふーん、ほんとに来たんだ．．．まあ、君のことだから来るとは思ってたけど。入りなよ」

「いや、理由を聞いたら直ぐ帰る」

「迷惑なの、こんなところで立ち話なんて」

永一は手を取られ中へ連れ込まれた。

中は3LDKになっていた。

．．．何者なんだ、並河って．．．

都心のマンション。家族の匂いはまったくしない。3

LDKに一人暮らしをしているようだ。家族と思われる

写真なども見当たらない。

茜はリビングのソファに座ってテレビを見始めた。永

一に適当に座るように言ったが、リビングの入口に立つ

たまま動こうとしなかった。自分が情けなくて茜の方を

見ることもできないでいる。

「どつして俺の写真はだめなんだ」

茜は溜め息をついた。

「『だめなんですか』、だろ」

永一は唇を噛む。

「．．．だ、だめ、なん、ですか」

茜は気怠そうにテレビを消して立ち上がった。そして

永一の方にゆっくりと近付いて来た。人差し指を立てて永一の胸をつつ突く。

「お前の写真は心も何もこもってないから。あるものがあるようにしか見えない。だからなの」

「な、なに、意味がわからねえよ。あるものがあるように写るのは当たり前じゃないか」

茜は髪をかきあげる。

「だーから、はつきり具体的に言っよ。構わない？」

君が傷付こうが、知らないよ」

「ああ」

ニヤつとして、再び永一の胸を小突く。

「例えば、お前の撮った花は綺麗だけど、まるで凶鑑

なんだよ。あんなのが見たかったら凶鑑を見りゃいい。

お前のその写真からは、『どつだ綺麗だろ』っていう独り

よがりの言葉しか聞こえてこないんだよ。また胸を小突

く。．．．それから、ハワイの写真。何々だよあれは、

旅行のパンフを作りたいのか？ だったら旅行会社へ行

けばいい。三神の何の変哲もない街角の写真の方がよっ

ぽどいい。あれからは、三神がその時感じた物哀しさが

伝わってくる。三神とは永一と同じ年の写真部の女の子

だ。まだ写真を始めて数ヶ月だ。また永一の胸を小突く。

「あと、お前の撮る女子は何？ 被写体のことじゃないぞ。そりゃ、みんな、かわいく写ってるよ。でも、みんなニツコリ、パチじゃ、お人形さんなんだよ。わかる？ アイドルのグラビアと同じ。その『人間』てものが見えてこない。ただかわいいうるのの写真が見たいなら、雑誌でも何でも買ってくるやいいんだ。．．．だから、お前の写真なんか見たくなる理由なんて、誰にも、これっぽっちもないんだ」

そして、茜は手の平を広げて軽く永一を突き飛ばした。永一はよろけ壁に背中を打った。精神的なダメージが大きかった。普通ならこのくらいでよろけるなんて考えられない。茜の言った写真はどれも自信のあるものばかりだった。実際、自慢さえしていた。それを完璧に否定されたのだ。既にひびの入っていた土台が、はつきり音をたて崩れ去っていった。力が思うように入らない。

茜は嘲るような笑みを浮かべると、永一に近寄り、自分の唇を永一の唇に重ねた。その意外な行動に永一は戸惑う。その口付けは、ひどく官能的なものだった。抵抗できない。魔法をかけられたような錯覚を覚える。

「な、な．．．に．．．を．．．」

「こっちにおいで」

茜は永一の手を引つ張って薄暗くなっている寝室へ連れて行った。そして、永一を突き飛ばしてベッドに倒し、自分はその傍らに座った。永一の手を取り、Ｔシャツ越しに自分の胸を触らせる。もう一方の手で永一の股間を押さえた。そこから快樂が伝わってくる。永一は何が起きているのか把握しきれなかった。思考が回らない。混乱している。

「お前、あたしをばかにしてなかったか？ 『鼻をへし折ってやる。犯ってやる』なんて、思ってたか？ お前の考えることなんて見え見えだ。お前の撮るものを見ればわかる。．．．どうだ、その女に鼻をへし折られた気分は．．．いいよ、望みを適えてやる。ただし、する、のは、あたしの方だ」

茜は永一のズボンのジッパーをおろし、硬くなっている、それ、を取り出した。永一の体がそれに反応し小さく動く。茜の手つきは男の体を良く知っているようだった。茜の手の動きに合わせて幾度となく体が反応する。やがて激しい快樂に襲われ茜の手の中で体が弾けた。

「服、脱ぎな」茜はＴシャツを脱ぎ捨て下半身も裸になった。永一は体に力が入らず、茜のなすままに裸にされた。茜は馬なりに永一の上に乗る。「女の体は、まだ知

らないだろう。・・・あたしが教えてやる」

永一は茜のするがままSEXにはまっていた。

ベッドの脇、ニヶ所で何かが光った。しかし快樂の霧に迷い込まれていた永一には、それが何の光かは、理解できなかった。

永一はベッドの上で裸のままタオルケットに包まれている。茜は今はいない。永一は今さっきまで起こっていたことを思いおこしていた。

・・・何々だ、一体。どういっつもりなんだ・・・思考が回復してくる。ベッド脇の光のことを思い出した。それが何であったのかはすぐに理解できた。

・・・フラッシュじゃないか・・・しながら、リモートでカメラを操作していたのだ。そんなこともわからなかったのかと情けなくなった。茜が部屋に戻って来る。

「シャワー使いなよ。それから、今、服は洗ってる。まさか、自分の精液付けたまま着て帰れないだろ」

永一は右手を茜の方に伸ばした。

「写真、よこせ」茜は予想外にすんなりと写真を渡した。カメラはデジタルカメラだったのだろう。それは、

プリンタで印刷されたものようだった。永一は、それを見て驚いた。その写真に写っていたのは永一ではなく、茜だったのだ。茜が絶頂に達した瞬間を捕えている。「どういっつもり」

「お前がイク瞬間の写真は、あたしが持つてる。それだけじゃ不公平だから、あたしが写っている方は君にあげるってわけ。これであたしたちは運命共同体だ」茜は永一のそばに寄り、耳元で囁く。「女が欲しければ、いつでも相手してやる。・・・そのかわりあたしの誘いも断るな。この写真は「ニヤツと笑う。」「裏切りっこ無し」・・・の、約束状だ」

・・・ひどいやつだ。楽しんでる・・・
「なあ、やりまくろっぜ」

最初のうちは、一方的に茜が誘っただけだった。永一は、初めのうち、ずっとそうだろうと思っていた。茜の誘いによるだけ、そう思っていた。しかし、体を重ねるうち、永一の場合は次第に麻痺させられていった。茜が近くにいたり、彼女の体から伝わって来る快樂の感覚を、拭い去ることができなくなっていた。そして、お互いがお互いの体を知りつくしていくうち、いつしか二人の関係

は対等になっていた。茜の方からの一方的なSEXだけではなくなっていたのだ。永一の方からも体を求めるようになり、茜はそれを楽しんでいるようだった。

現在。

永一は、茜が高校を卒業する直前にした、最後の「関係」を記憶のレコーダから再生していた。その場面で、永一は茜の体を愛撫していた。永一の手の動きにシンク口して、茜は激しく体をよじらせ、快楽に浸りながら果てていく、そんなシーンだった。

電車が目的の駅に着くと同時に、記憶のレコーダも、ちよつとそこでテープが切れた。

久し振りの茜のマンション。ドアを開ける茜。

「なんだ来たのか・・・心配したのか」

茜は疲れているように見えた。

「ちよつと気になっただけさ。』声が聞きたくなくなったけど」なんて、暗い声で・・・らしくないから」

茜は永一を中へ入れた。相変わらず家族の匂いの新しい部屋だ。茜はリビングのソファに横になって目を閉じる。何か、精神的にひどくまいっているようだった。こんな茜を見るのは初めてだ。心配になる。永一は少し離

れた所で立つたまま声をかけた。

「何かあったのか」

「・・・お前には関係ない。大丈夫だ」

「・・・そうか・・・大丈夫なら、俺は帰るが」

「・・・なあ、今から、しないか」

永一は溜め息をついた。

「そういうつもりで来たんじゃない。帰るよ」

「帰りがける永一を、すぐるように呼び止める。」

「・・・ここに、いてくれないか」

永一は茜のそばに寄った。

「泣いてるのか・・・理由を言えば、いるよ」

「・・・意地が悪いな」茜はためらっているようだったが、「葵が死んだ」と声を絞り出すように言った。「銃

で撃たれてドブ川で土左衛門だ」

最初、葵とは姉か妹のことだと思ったが、そうではな

いようだった。女でもない。小さい頃から一緒に育った

男だという。写真を教えたのも、男の体を教えたのも、

この葵という男なのだそうだ。彼は戦場を撮りに行って

いたという。永一は、展示会で茜が展示した「危うい目

をした男」を思い出した。それがそうなのかもしれない。

茜は彼のことを話しながらずと泣いていた。いつも強

きな茜が泣いている。傷付いて脆くなっている。永一は、茜も自分と同じように、何かあった時、何かの拍子にひどく脆くなる人だとは思っていた。どこか、そういう匂いがしていた。しかし、ここまで脆くなるとは思っていなかった。放っておいたら何かでかしそうに思えた。永一は次第に胸が苦しくなってくる。茜は永一の首に手を回し抱き着いてきた。弱々しい茜。彼女を慰めたくなく。抱き締め返した。それだけのつもりだった。茜は激しく求め始める。永一は戸惑った。重ねる唇。蘇る体の記憶。記憶の呪縛。いつの間にか拒めなくなっていた。気付いたときにはもう止まらなかった。

翌日、携帯の音で目が覚めた。茜のベッドの上だ。陽はかなり高かった。隣では茜がまだ眠っている。携帯はベッド脇に落ちている服のポケットだった。起き上がりベッド脇に腰掛けて携帯を取り出した。木原だ。

「夕べは悪かった。何だ」

「うーん、ちょっと話したくて。今、家ですか、ちょっと出れませんか？」

「愚痴こぼしの相手か」

「う、さすが、鋭い」

「木原の考えてることなんか見え見えだ。．．．が、悪い、今日はだめだ。明日も、家の留守番で都合が悪い。あさつてならいい」

「あ、明日、出れないなら、先輩の家に行きます」

「．．．俺一人だけ」

「え、何か、一人だと都合悪いんですか」

「．．．ちつ、信用しきってる。疑いもしない．．．」

「いや、じゃ、明日待ってる」

携帯を切る。

「．．．まさか、俺が女の所で、裸で話してたなんて、想像もしないだろうな。知ったら、嫌うかな．．．」

「写真の女か」

横になったまま茜が言った。

「あ、わりイ。起こしちゃったか．．．そう、あの写真の娘だ。たまに話を聞いてやってる」

その写真とは、高校時代、永一が撮った木原の写真のことだ。4つの感情をうまく捕えている。学祭のときに展示しており、そこでその写真を茜は見ていた。

「もう、した、のか」

「いや、木原とは、そういう関係じゃない。なんか、妹みたいないな、．．．きつと妹がいたら、あんな感じなんじ

やないかな。それにあいつには好きな奴がいる。付き合
ってたけど別れちまった。でも・・・あれだ、『別れても
好きな人』ってゆうやつなんだな。お互い嫌いで別れた
んじゃないから、いつか、より戻すんじゃないかな・・・
なんか、木原ってかわいいやつでさ、変にいじって壊れ
させたくない」

「そうか、・・・そういつ関係、いいな。・・・でも、
いつかしたくなるんじゃないか？」

少し考えてみる。

「うーん。ならないと思う。・・・たぶん」

「そう。そんな関係、あたしたちには、もう無理だな。

お前、自己中だったのに随分いい奴になったな。お前の
写真を見ればわかる。あの写真、いい写真だった」

・・・俺が、いい奴、まさか・・・

「いや、木原だけ特別なんだ」

「お前、あの頃、三神と付き合ってたか？」

「え、・・・うん」

「・・・そうか、悪いことしたな」

永一は服を着始めた。

「永一、例の写真、その鏡台の引き出しにある。勝
手に持ってけ。煮るなり焼くなり好きにしな」

永一は服を着終わると、鏡台の引き出しを開けてみた。
例の写真はすぐに見つかった。今さらどうでもいい写真
だが、自分の絶頂に達した顔を捕えた写真なんて気色が
悪い。処分するにこしたことはない。その写真を手にす
る。しかしそこで自分の中の何かが拒んだ。

・・・何をためらう・・・

「どうした。・・・いらぬのか」

「い、・・・いや、片割れの写真を持ってきていない。
それじゃ、フェアじゃないだろ。今度、来ることがあつ
たら、そのときにしよう」

「また、来るつもりがあるんだな。・・・それなら、あ
たしと世界に出ないか。二人で世界を撮るんだ」その意
外な言葉に、永一は啞然としていた。すると、急に茜は
噴き出して笑った。「冗談だ。本気にするな」

「いや、今、ちよつといいかも、と思った」

「ばかだな、お前が描いている将来を捨てるつていう
意味も含んでるんだぞ。あたしと一緒にだと、たぶん、お
前の人生、メチャメチャになる」

永一は、たしかにそれはあるかもしれないと思った。

茜と一緒にいいことがあるとは、あまり思えない。

「らしくないじゃん。俺の心配するなんて」

茜はまた笑った。

「お前が変わったように、あたしも、変わっていく。おかしいことじゃない。今は、あのとき、お前をはめたことを後悔してる。ほんとうだ」

「・・・葵って、やつ、の、せいかな・・・
帰り際、玄関でのこと。」

「ありがとな・・・来てくれてよかった。それから、お前があたしのせいで悪い奴にならなくて、よかった」

「・・・なんで礼なんか。よかつただなんて・・・
その時の茜の表情。柔らかい表情だった。妙にいとおしくなってしまう笑顔だった。頭から離れなくなる。」

翌日、自宅のベッドの上で考えていた。

「・・・俺は、茜の様子があまりにもいつもと違うから、ちよつと気になっただけなんだ。基本的に茜がどうなるうが、知ったことじゃない。俺はそんなにお人好じじゃない。木原も、どうして俺を慕うんだ。たしかに色々面倒を見てやっている。しかし、木原があいつと別れたきつかけは、俺が撮った木原の写真じゃないか。俺が一步、心に踏み込んで木原の感情を撮ったから、それがトリガになつたんじゃないか。俺はそうなるかもしれないと承

知の上で展示したんだ。なのに、どうして・・・

インタホンに呼ばれて玄関へ来る。ドアを開けると、上下、白のツイースの女が立っていた。木原だ。茜のようなセックスアピールのある女じゃない。

「よお・・・届く予定の荷物、届いててさ、もう家にいなくてもいいんだ・・・外へ行くか」

「ご家族は、どうしてるんですか」

「うん、旅行してて、今、誰もいない」

「じゃ、いいですよ。わざわざ外へお金使いに行く必要はないでしょ」

木原は中へ入って来た。永一は自分の部屋に通す。麦茶くらいは出してやる。木原は、永一の部屋で足を伸ばしてくつろいだ。部屋へ通すのは初めてだったが、やけに落ち着いている。永一はベッドに腰掛ける。

木原の話は、今の写真部の話だった。永一が高校時代、特別、木原をかわいがっていたため、今の二年、三年の中には、木原を良く思っていない者がいる。特に、現部長がそうらしい。なら、たしかに立場は悪い。

「今度、先輩から言つて下さいよ」

「なんか、子供の喧嘩に口出す親みたいで、やだ」

「フン、ケチ」

「ところで、あいつから、連絡あったか」木原の別れた男のことだ。木原は理解したらしい。急に黙り込んだ。今、彼はアメリカにいる。「ないのか。そっちなら、口出してもいい。俺が連絡つけようか」

「・・・いいです」

連絡がなくて、拗ねてるように見える。

「お前、他に男作るつもりは、もうろん無いよな」

「ハハ、『兄貴』っていたら、そんなこと言うのかな。・・・うーん、今のところないけど・・・でも、これじゃ、わたし、今後、一生男できないままかも・・・彼ともキスしかしてないんですよ。・・・なんか、つまらないな。・・・もつ、誰でもいいって感じ」

「・・・お前の『思い』、そんなものなのか?・・・」

「そういうこと、男と二人きりで言うな」木原は、最初なんのことを言っているのかわからないようだった。しかし、たしかに、永一と二人きりだ。理解した。木原から見て、永一は少し怒っているように見えた。「お前ら、お互い、まだ好きなんだろ。あいつは、木原を待ってるって言ったんだろ。なら、あいつは待ってるよ。お前がフラフラしてんなよ」

「そんな。わたしは、もう彼のことは忘れ・・・」

木原の言葉を最後まで聞く前に遮る。

「ムカツク。じゃ、試してやる。来い」永一は木原の手を取って引つ張った。ベッドに倒す。スカートの中に片手を入れ、太腿に手を置き、上へスライドさせた。木原の両手がそれを阻止する。内腿をきつく閉じた。永一はもう一方の手で木原の胸に触れる。彼女の神経がそちらへ移動し下半身の力が一瞬緩む。その隙に、内腿に自分の膝を押し込んだ。これで閉じられない。スカートの手はさらに奥へ進む。それぞれの手で、永一の両手の動きを阻止しようとするが、力で敵わない。木原はパニックになっているようだった。永一は、そこで動きを止めた。「男と二人きりになるって、こういうことも、あり、なんだぜ。『誰でもいい』? 『忘れた』? お前、そんな奴じゃないだろ。だから、抵抗してるんじゃないのか。気軽に男の部屋へなんか来るな」

息の上がついている木原。永一を見れないでいる。永一が離れようとする、木原は恐る恐る永一の方を見た。それと同時に木原の体から力が抜ける。

「先輩、いいですよ。わたし、もう抵抗しない」

永一は驚いた。

「な、・・・お前、ほんとに誰でもいいのか?」

「・・・違う。先輩、大事にしてくれそうだから」
一瞬、浮かぶ想像。自分の腕の中、快楽に弾けていく
木原。衝動に襲われる。

・・・ほんとに、やっちゃまうか・・・
しかし、すぐにブレーキをかける自分が現れる。

・・・違う、違う、それを望んじやいない。俺と同じ
目には合わせたくない・・・

「ああ、大事にしてやるさ。かわいがってやるさ・・・
でも、想像してみる。戻ってきたあいつが、お前を抱く
ときのことを。俺はお前の全身を愛撫してやる。その日
が来るまでずっとだ。あいつが、初めて触れるところな
んか、ないくらいにな。あいつがお前のごを触れよう
が、お前は、いつも俺のことを思い出すんだ。それでも
いいのか？ え、答えてみる」

それを聞いて、木原はしばらくじっと黙っていたが、
急にポロポロと泣き始めた。木原から離れる。

・・・あーあ、泣かしちゃった。俺って、ほんと、ひ
どい奴だ。もっと良い言い方があったかもしれない。こ
んな、厭らしい言い方、やり方するなんて。これで「良
い先輩」も終わりだな・・・

しかし、次の木原の言葉が意外だった。

「ごめんね、先輩。やっぱり、わたし、彼のが好
きだ。今・・・わかった。ありがとね、先輩」
驚いて木原の方を見る。

・・・「ありがとう」なんて言うな。俺は、構わないか
ら、やっちゃまおうと思っただんだ・・・

「脅かして、悪かった」

木原は、笑顔を作って首を横に振った。

それから、数日後の真夜、自分の部屋でカメラの手入
れをしていると、並河茜から携帯に電話がかかってきた。
茜はここ数日、学校に来ていなかったらしく、部屋で見
掛けなかった。電話で本人も休んでいたと認めた。
茜は用件を言ったらすぐ切るつもりだったようだが、
永一が木原とのことを話し始めたので長くなった。

「そうか、結局、しなかったんだな」

「うん、茜に偉そうなこと言ってるし。よかった」

「いい兄貴だな・・・少し押し付けがましいが」

「あ、やっぱ、そう思う。結局、俺って自己中な」

「なんか、彼女がうらやましいよ・・・あたしらも、
そつという関係の方が良かったか？」

永一は言葉に詰まる。自分に尋ねてみる。体だけの関

係、・・・それを望んでいたか。それは、はつきりNOだった。では、姉弟のような関係、・・・それも違うような気がする。それでは、何でもない関係、・・・あの頃、いや、それよりも今、それを望んでいるだろうか。・・・それと違うような気がした。永一は、自分が、どうしたいのかわからなかった。

「よく、わかんねえや」

「そうか。・・・で、電話した理由だが」

「うん」

「例の写真、今さっき燃やして捨てた。心配するな。画像データも、全部消した。・・・お前が持つてる方は、お前の好きにして、いい」

「・・・そう、・・・わかった。・・・じゃ、俺も処分するよ。・・・じゃないと、不公平だから」そう言った瞬間、永一は、急に心に空洞ができるような怖さを覚えた。考えてみると、理由はすぐに思い当たった。茜とつながるものが無くなることに不安を感じているのだった。どういう形であれ、茜を失いたくないと思う自分がいる。自己中ではあるけど、茜は、壊れたときの脆さを持っている。その危なっかしさが、ひどくいとおしいと感じられた。「あ、あの、ちょっと待って。俺たち、今からで

も、・・・普通に始めることって、・・・」

そこまで言ったところで茜は遮った。

「明日、朝、来てくれないか。お前に来てほしい」

「え、あ、いいけどさ、・・・いいけど、俺を誘惑するなよ。俺、すぐ、茜に、はまっちゃうからさ」

「大丈夫だ。そんな心配はない」

電話を切った。

カメラの手入れに戻る。作業をしながら、今の電話の内容を思いおこした。よくよく考えて見れば、腑に落ちないことがいくつもあった。何故、写真を燃やしたと電話で言ってきたのだろうか。学校で言えば済む話だ。茜は、それくらいで電話をしてくるようなやつじゃない。まるで、もう、学校に来ないつもりのように聞こえる。そこで、作業の手を止めた。それから、明日朝、来てくれ、というのは変だ。それなら写真は、処分しなくたってよかった筈だ。明日朝、片割われと交換すればよい。何か、矛盾している。まるで、明日朝、茜がいないみいだ。「燃やした、心配するな」というのも変だ。まるで、茜の部屋に誰かが来た時に、その誰かに見付からないように処分した、という感じだ。永一が、明日の朝、行くというのにな。なぜ、そんな警戒が必要なのか。今から、

明日の朝までに、一体、誰が「来る」というのだろうか。整理すると、「茜が、あしたの朝いないかもしれない」「代わりに他の誰かがいるかもしれない」「そこへ来い」と言っているように思える。

永一は、ひどい胸騒ぎを覚えた。

いくつか、仮説を立ててみる。

先日見せた、茜の脆い一面。

一人にしておいたら、何かしでかしそうだった。

もう、学校に来ないつもりの方。

・・・いや、「来れない」？・・・

いくつかの仮説の中の一つを考えた時、しっくりくるものがあつた。その瞬間、永一は部屋を飛び出した。父親のクルマのキーを勝手に持ち出し、クルマを出す。茜のマンションへと向かった。

・・・もし、「来る」のが、警察だとしたら・・・

茜のマンションの前でクルマのエンジンも切らず乗り捨てた。茜の部屋は、鍵がかかっていた。茜は、

・・・それは俺が、勝手に、入れるように？・・・

バスルームでシャワーの音がしている。バスルームを開けてみる。予感的中していた。足がすくんだ。一瞬、頭が白くなる。どうしたらいいか、すぐにはわからな

った。浴槽の中は真っ赤だ。茜は脇で右手を浴槽に突っ込んでくったりしていた。意識はない。我に返ってバスルームの中に入った。シャワーを止めて、茜の手を浴槽から出す。手首からポタポタと血が流れ落ちる。ソックスを履いた足がその血を踏む。茜からは酒臭い匂いが漂ってくる。生きてる。酒はかなり飲んでそうだった。

・・・どうすりゃいい。止血？・・・

どのように止血したらいいかわからない。それが正しいのかもわからない。黙って見てもいられない。とりあえず目に付いたタオルで手首の上の辺りを縛った。それから救急箱を探しに行く。三年前から場所は変わってなかった。包帯を取り出して茜の方へ戻る。茜は意識が戻っていた。かなり、混沌としているようだが、永一は、少し安心した。それと同時に、こんなに傷付いてしまっている茜に悲しみを覚えた。

「うん、来るのが、早い」

「つたく、何が『早い』だ。ひどいにもほどがある。

俺に死んでるところ、見付けさせるつもりだ。なんて、いいかげんにしてくれ」

「・・・ごめん。でもお前に見付けてほしかった」

永一は泣けてきた。包帯を巻きながら涙がこぼれてく

る。涙のせいで巻きずらい。目を自分の肩にあて、そこでこすって涙を拭いた。血に染まっていく包帯。滴っていく血。永一は手が震えた。

「・・・血イ、止まれ、止まってくれよう・・・

「なんで、切つちまうんだよう」

混沌とした無表情で茜は答える。

「・・・あたしは、葵が死んで、半身を失ったのと同じだった。あたしは、今、0・5人なんだ。それじゃ変だろ。だから、残った半身を消すんだ」

涙が止まらない。震えも止まらない。

「・・・巻きずれえ。震え、止まれえ・・・

「ばっかじゃねえの。勝手なこと言っつて。んな人間いねえよ。俺も一人、茜も一人だ。半分じゃねえ」

茜は、ぼんやり永一を見ている。

「・・・ところで、お前、なんで泣いてるんだ」

「知らね。きつと茜に死んでほしくないからだよ」

「あたしのこと・・・嫌いなんじゃないのか」

「だったら、死んでも同じ大学避けるさ。こんなふうには飛んて来たりしないさ。お前、悪いことしか思い出してないだろ。この部屋で一緒にテレビ見て笑ったり、写真のことを話したこともあっただろ。どうしてそう

いうことは思い出さないんだ」イラついている。しかし、すぐに反省する。「・・・ごめん、偉そうに。実は、俺も忘れてた。最近になってよく思い出すんだ。良かったこととさ」

茜は少しの間、黙っていた。彼女は、気怠そうな表情のまま、静かに泣き始めた。

「・・・そうか、謎が、一つ解けたよ」

「格好悪いな、二人して泣いてんじゃねえよ・・・なあ、この間の、二人で世界を撮ろうって話、行こうぜ、二人で世界、撮ろうぜ」

「・・・お前の未来、壊したくない」

「だから、茜は自己中だっつていうんだよ。俺の未来って何だ。勝手に決めんなつての。俺の未来は、これから俺が作るんだ。まだ、ねえんだよ。それに、俺は、写真を撮っていられるなら、未来は無くなりやしねえんだ。・・・それから、欲を言やあ、あとは茜がいれば充分だ。他はいらねえ」

茜の目から流れる涙が増える。

「・・・そっか、お前、やっぱり、いいやつだな・・・わかった。なんか、嬉しい・・・どうも、あたしはお前が好きみたいだ・・・祈っててくれなにか」

「何を」

「あたしが死なないように・・・」

「ったく・・・もうとっくに祈ってる」

包帯が巻き終わる。そこで、永一は重要なことに気付いた。救急車を呼んでいない。

・・・チイツ、バカヤロー・・・

電話をかけて戻ってくる。茜は酒のせいと、出血のせいで、首が座っていない。浴槽の縁に頭を預けている。動かしたものでどうかと思っただが、茜が、

「記念写真、撮ろう。二人の・・・始まりの」

そう言うので、抱えてリビングへ連れて行きソファに座らせた。そして、茜の一眼レフカメラにフィルムを装填し、三脚ののせてソファの前に設置した。照明は不十分。レフ板もない。白いシートをベッドから引き剥がして持つてくる。低いテーブルをソファの前に寄せて、その上にシートをのせる。レフ板の代用だ。カメラは絞り優先モードにする。露出補正値を経験的な値で合わせた。

・・・充分じゃないけど、これが精一杯。いや、この写真は綺麗じゃ、だめだ。これでいい・・・

茜の横に座る。茜を抱き寄せ、自分に寄り掛からせる。すべてを預かる。茜は目を閉じて頭を永一の肩にのせた。

体を密着させる。

二人とも服や体の所々が、血で汚れている。

「なあ、キス」茜のその言葉で、永一は、茜の唇に指をあてた。「違う」茜はそう言い、傷付いていない方で自分の額に触れた。

そこにしてくれ、ということらしい。

「そうだね。今度は・・・ここから始めよう」

「うん」

永一は茜の額に、そつと唇を付けた。同時にリモートでカメラを操作する。フラッシュが二人を包んだ。

アリシアの憂鬱

砂塔 悠希

ロイヤルマイルをパレスから城へアリシアは重い気分を抱えたまま歩いてきた。

エデイの城で働くようになって3年、城主のエドワード様は立派な方だし、仕事も決して嫌いではない、嫌いではないのだけれど……

「戻りたくないなあ」

アリシアは抜けるような青空を見上げて独り呟いた。遠く北の直轄領の方では戦争の噂も囁かれている。南の国境地帯は今こそ休戦状態だけれど、いつ南方の蛮族が侵入してくるかもしれないという緊張状態に置かれている。なのにこのローランド地方は何の変哲もない日々が、緩やかな時の風につれて流れている。

『北も南も大変よね。だけど、今のあたしの問題は——』

威圧するような城門を見上げ、アリシアは再びため息

を吐いた。

そんな風に平和なときだからこそその問題なのかもしれない。

領主エドワードの一人息子ギルバートが、王城の勤務から戻ってきたのはひと月前。本人はエデイの城の警護を固めるためだと宣っているが、その実、戦地にだされるの怖さに逃げ帰って来たのだというのがもっぱらのだ。

そうして城内を見回るといつてはメイドを物色し、片っ端から手を出しているという。そんなギルバートが今目を付けているのがアリシアだというわけだ。

『よりによつて、何であたし何だろう？』

家柄が良いわけでも、飛び抜けて器量良しというわけでもないことは、アリシアにも自覚があった。他の女の子たちのように、なんだか分からないけれどおめがねに止まった、と手放して喜べるほど幸せな性格もしていない。だから、ギルバートの行動がいまいち理解できない。できない以上彼を好きになるなどということは考えもつかないし、結局、言い寄られるのは迷惑でしかないのだ。それに。

「好みじゃないのよねえ」

憂鬱に支配されて思わず口から本音が出た。だから後ろからかけられた声に、思わず荷物を取り落としそうになってしまったのだ。

「何が好みじゃないって？」

「あの、いえ、あの……」

アリシアは真つ赤になって俯いた。よりによって、その好みじゃない本人に声をかけられるまで気がつかないなんて。

「重そうだね。持ってあげよう」

ギルバートはアリシアの荷物をひよいと持ち上げると、小首を傾げてアリシアを見る。短めの暗い金髪グレイプ blondがふわりと風に揺れる。

「使者の方々が来られなくなって散々だったんじゃないか？あれだけ忙しい思いしてさ」

「……………」

ふらふらと遊んでいるようでいて結構しっかり見ている。

『優しいとこ、あるんだ』

背は高いし、顔も悪くはない。その上優しいと来たらふらりと来ない女の子は少ないだろう。アリシアが城に上がってら間もなく王城に移ってしまっていたこともあ

って、アリシア自身ギルバートのことはほとんど知らない。本人をよく知らずして“好みじゃない”などと思うのは言語道断なのだが、なにしろ城内の噂はとにかく軽薄短調、八方美人のお調子者というところだから悪いイメージばかりが先行している。それに、そう噂されるほうにも非はあるに違いないのだし。

「———だよな？」

狭い階段を上り切ったところで、前を歩いていたギルバートが振り返って聞いた。

「えっ？」

「グレートホール 大広間」に持って行くんだらう？これ」

「あ、ええ。でも、ここでいいです。ありがとうございます」

階段を上がりきった右手の聖廟の前に立ち、ぎこちない態度でアリシアはギルバートに頭を下げる。

「すぐ、そこじゃないか。持って行くよ」

「でも……」

こんなふう二人でいるところを———それも荷物なんか持つてもらったりして———人に見られてもしたら……。こちらにその気がなくても、あつと言う間に城中あらぬ噂が渦をまいてしまう。それははつきり言って困る

のだ。

「——ああ、ごめん。困らせるつもりはなかったんだけど……。ただ、もう少し話がしたいと思って」

よほど困った顔になってしまっていたのか、ギルバートは少し罪悪感を覚えたようだ。しかし、その後の行動がいけない。アリシアの肩を抱くようにして、聖廟の方へと向かい始めたのだ。

『げっ』

背筋に震えが走る。そう感じたたとたん、肩に置かれた手をぴしゃりと払いのけていた。

『あー、まずい。フォローのできないことをしちゃったわ』

何がおこったのかとあせんとするギルバートを上目づかいに見て、アリシアは少し芝居がかかるように小さく言う。

「あの、虫かと思って……すみません。ここでほんといいですっ。ありがとうございました」

ひったくるように荷物をとると、アリシアは大広間に向かつて小走りに歩き出した。

『怒ったかなあ。減給になっちゃう？——もしかしてクビかも……』

そんな人間ではないとは思うが、お貴族様のすることはよくわからない。

呆然と聖廟の前に立ち尽くすギルバートをちらりと顧みて、ほんの少し、罪悪感を感じてしまったりするアリシアだった。

「み・て・た・わ・よ」

宮殿の入り口前を通り過ぎようとしたアリシアの足を止めたのは、メリー・アンの声だった。宮殿と大広間、給仕棟に教会、4つの建物に囲まれた中庭の中ほど、メイドたちの出入り口の扉にもたれかかるようにして、メリー・アンは半眼でアリシアを見つめていた。

「……な、なにを？」

アリシアは、声の主が親友のメリー・アンであったことに内心ホツとしながら問い掛ける。

「もう、わかってるのよっ。白状なさいっ。今そこでギルバート様と何があったの？」

メリー・アンはいやいやをするように、艶のない赤毛のおさげ髪を振り回して言った。

「——何って……何かしているように見えた？」

おずおずと尋ねるアリシア。

「んまあ！あくまでもとぼけるつもりねっ！あたしにだけは隠し事はしないって約束したじゃないの。あああ、あたしたちの友情もこれまでなのね。所詮女の友情なんて好きな男の前にはもろくも崩れ去るものなのねえ」
だんだんに芝居がかったきたメリー・アンの台詞に、アリシアは思わず吹き出した。

「じゃ、あたし半分持つわね」

唐突に夢から覚めたように普段の顔に戻ったメリー・アンが、アリシアの荷物に手を添えた。大広間はすぐ目の前だ。大きなバスケットに入ったテーブルクロスや大皿を、二人の少女はおしゃべりを続けながら大広間の定位置に戻していく。

「でも、ホント、いい感じだったわよあ。いったい何を話していたの？」

柔らかなクロスで、それらの食器を慎重に置きながら興味津々と言った風にメリー・アンが聞く。

「別に。御使者こられなくて残念だとかそんなことを少し話しただけよ」

そう、ただそれだけのこと。なのに頬が熱くなってしまったのはなぜなのだろう。

「ふん？」

メリー・アンはどうも信じていないように、鼻を鳴らした。

「ま、化石ミスのエイリインにだけは目をつけられないようにね。もう二〇歳超えてるつてのに未だ玉の輿狙ってるらしいから、あんな風に好い感じのどこなんか見ちゃったら大変よあ」

おどけたように、メリー・アンが言う。

「アリシアは戻ったのかしら？」

「ヴッ」

入り口からかけられた涼やかな声に、口元を押さえてメリー・アンはうめいた。広い大広間グレートホールの端と端で、けて大きな声ではなかったとはいえ、噂の主に現れられて咄嗟にどう反応すべきかを知るほど彼女たちは大人ではない。返事をすることも忘れ固まってしまったアリシアに、エイリインは続けて声をかけた。

「あら、戻っているのなら返事くらいなさい。アリシア」

「は、はいい！」

上ずった声でぎこちなく振り返るアリシアの手にはクロスと領主お気に入りの大皿。エイリインはちらりとそれに目をやると、小さくため息をついた。

「……じき、夕食の時間よ。そちらを手早く済ませて持

ち場に戻りなさい。メリー・アン、あなたもよ」

立ち尽くすアリシアを上から下までじっとねめつけるように見つめたエイリインは、それだけを言うとすぐに踵を返した。話を聞かれたかと身を固くしていた二人は、ホツと胸をなでおろし、どちらからともなくクスリと笑うと食器を片付けて持ち場へと戻っていった。

一日の仕事の終わりに、聖廟の椅子を磨くことがアリシアの日課だった。誰に言われたのでもない。ただ、アリシアはここが好きだった。だから、誰がいつ来てもしいように綺麗にしておきたいと思つて、仕事が終わってから自主的に行つてゐることだった。多分、メリー・アンですら知らないアリシア一人の日課だ。

「まだ、仕事なのかい？」

背後からかけられた声に、びくりとして振り返る。廟の扉を背に、暗い金髪ダークブロードがほの暗いろうそくの明かりに光つて見える。ギルバートが、少し驚いたような顔でそこに立っていた。

「
声にならない声を上げて、むやみに振り回したアリシアの手から飛んだ雑巾が、ギルバートの顔を直撃する。」

ビチャリと床に落ちた雑巾を拾いながら微苦笑を浮かべたギルバートの目に怒りはない。

「そんなに驚かなくてもいいだろう？ここは僕の母の廟なのだから」

言葉を失つたままじっと見つめるアリシアに、ため息をつくようにギルバートは言う。手近な椅子に腰掛けた腰に吊した剣がガシャリと音をたてる。その音をアリシアは、意外なものように思った。平穩なはずの低地地方の、それも一番安全なはずの城の中で、領主の息子が夕食後の最もくつろいでいるはずの時間に剣を携えているなんて……。下級ではあるが、アリシアの父も騎士だ。けれど、その父が出かけるとき以外に剣を携えているところなど、アリシアは見たことがなかった。

アリシアのそんな思いにも気がつかないのか、ギルバートは垂れた頭の前で両の手を組み合わせ小さく何かつぶやいた。

「そつとしておいたほうがいいのかしら？ 掃除を続けたほうが良いのか、黙って廟を出たほうが良いのかアリシアは次の行動を迷つてエプロンの裾をぎゅつと握つた。しかし、掃除を続けるにも雑巾はギルバートの手の中だし、廟を出るにはギルバートの前を通らなくてはならな

い。アリシアは、仕方なくギルバートに声をかけることにした。

「あの……」

「母は、あの海の向こう、ベルングの人間でね。海の見えるこの場所がとても好きだった」

声掛けに気づかないかのように話し始めたギルバートに、アリシアは次の言葉を飲みこんでしまった。

「母は、僕がまだ小さいころに亡くなってしまったけれど、僕はよく覚えているよ。……君は、母に似ている」

「え？」

そう言われて思わずアリシアは、聖廟の中に飾られた肖像画に目をやった。明るい金の髪、薄い青の瞳、整った顔立ちの女性が品のよい微笑を浮かべている。確かに髪の色と目の色は同じだけれど……

「外見のことではないよ。纏っている空気、とでも言うのかな、そういうたものが似ている」

ギルバートは笑ったようだ。けれどそれは彼がいつも見せているような、軽薄とも見える明るい笑いではなく……。アリシアはキュッと胸を締め付けられるような気がした。エプロンの裾をつかむ手に力がこもる。

「何か、和ませてくれる」

それってあたしがドジだから？と思いはしたが口には出せなかった。ギルバートが目を上げてじっとアリシアを見つめていたから。その優しいけれど強い眼差しの奥に小さく揺れている何かに気づいてしまったから。

「ごめん、こんな話。死んだ人に似ているなんて言われていい気分なんかするわけないよね。ばかだな、僕は」

「あの……そんなことないです。あ、じゃなくて……あたしは——」

咄嗟に口を開くが、何が言いたいのか自分でもわからなくて、アリシアはまた黙ってしまった。

「ごめん、困らせてしまったね。——僕は、君を困らせてばかりだ——」

ギルバートの瞳の光が急速に弱くなって、薄い笑いを浮かべる。いつも自信に満ちている彼の姿とのどうにもならないギャップ。その理由はわからないけれど、今彼を落胆させたのは自分なのだ。その思いだけが、どう反応していいかわからないアリシアを動かした。

「えっ？」

「あ……」

気がつくくと、アリシアはギルバートの頭をかき抱いていた。

「ああああ、あの、すみません。あたし……」

慌てて飛びのいた拍子にべちゃりと尻餅をついてしまったアリシアに照れ隠しのような笑みを浮かべながら、ギルバートは手を貸して立ちあがらせると、今まで自分の座っていた椅子の隣に腰掛けさせて、自らも隣に腰掛ける。

「君って人はまったく——」

苦笑とともに囁くギルバートの言葉に、アリシアは頬が熱くなるのを感じた。真っ赤になってうつむくアリシアの頭にぼんぼんと2回手を乗せると、ギルバートは立ちあがって言った。

「仕事の邪魔をして悪かったね。僕は部屋に戻るよ。」

明日も、ここで会えるかな？」

アリシアは目をあわすこともできず、うつむいたままコクリと頷いた。扉が閉じる音がする。ただぼんやりとその音を聞いていることしかできないアリシアだった。

「何かいい事でもあったの？」

前庭の掃除をする手を休めてメリー・アンが意味ありげな視線を投げかける。

「へっ？」

「最近なんか違うわよ、あなた」

「そ……そう？」

どう違うのかなんて本人にわかるわけではない。ただ、少し失敗は減ったかなあなどとぼんやり考えてしまう。

「はっくじょうなさいっ！あたしとあなたの仲でしょう？ ギルバート様と何かあった？ ん？」

どきつと心臓が鳴る。

「なっ！なんでそんなっ！」

あれからギルバートは毎日のようにアリシアの掃除中に聖廟を訪れてはアリシアとの会話を求めてくるようになった。もつとも、一方的にギルバートが喋り、アリシアは聞き役に徹しているので、はたしてそれを会話と呼べるのかは定かではないが。

それでも、断片的にはあるが、彼の生い立ちや王城での出来事、父の所領エディに戻ってきた本当の理由などを聞いているうちにアリシアの固定観念も少しずつ変わってきた。そして昨晚、返事はいつでもいいからと前置きされてプロポーズされたのだ。けれどそんなこと、たとえメリー・アンでも返事をする前になんか言えない。

「隠さない隠さない。押し倒されでもした？ あなたもとうとう男を知っちゃったのねえ。でもでもだめよ、相

手はあのギルバート様。きつと遊びに決まっているわ。何度が抱いて飽きたらポイよ。ええ、そうに決まっているわ。今ならまだ間に合う、あなたならきつとすてきな男性と結ばれることもあるわ。次は拒絶するのよ。失ったバージンは戻らないけれど……」

「あたしはまだバージンよっ」

勝手に想像を逞しくしていくメリー・アンに思わず怒鳴りつけて周囲を見回す。朝まだ早い前庭に、他の人の気配はない。朝食前の忙しい時間に他人の行動に注意を払っているひまはない。そのひまがあるとすれば……宮殿二階の窓に、ギルバートの姿を見たような気がしてアリシアは首をすくめた。

「はああああああ」

きよとんとアリシアを見つめるメリー・アンをよそに、長い長いため息をついて抜けるような青空を見上げた。そのアリシアの顔に憂いはない。ただ、一步を踏み出すタイミングをはかりかねているだけ。その一步を踏み出す勇気を、とアリシアは青い空に祈った。

連載第 2 回

TOY

森のクマさん(二)

by K.Shimokoshi

少年が走っているのをTOYは見ていた。その少年は河原へと急いでいた。どうして「河原」と思ったのか、わからなかったが、TOYには何故かはつきりとそう思えた。少年は既に随分と走っているようだった。酷く息が苦しそうだったが、立ち止まるうとはしなかった。

肩で息をしている。

足は、ふらふらとよたついている。

唇は乾き、額の汗が頬をつたう。

顔をよく覗き込んで見ると、それは少年時代のTOYだった。TOYがそう気付くと、次の瞬間からTOYの意識は、その少年の意識となっていた。

少年となったTOYは走り続けた。

ある場所へと向って走り続けた。

縛れて派手に転んだが、すぐ起き上がって走り続ける。目的の場所には人形が落ちていた。その人形は川岸にうちあげられており、体の半分が水に浸かっていた。傷だらけで、ひどく汚れている。TOYはそれを見ると一瞬声を失ったが、次の瞬間、意味不明な言葉を発して喚き始めた。やがてその場に、一人の大人の男が現れる。その男は人形のそばまで行くと、人形の片手をつかんで取り上げた。そして、TOYには目もくれず、別の方へと向って歩き始める。TOYは慌てて男を追い掛けた。追い掛けながら、TOYは、母さんを連れていくな、と叫んでいた。人形のことを言っている。男は振り返ると、しばらくTOYの顔をまじまじと見てから言った。

「なんだ、ここにも壊れたおもちゃが落ちてる」

男はTOYの腕をつかんで持ち上げた。TOYは、その瞬間から体がおもちゃになっていた。いや、なった、と言うより、自分がおもちゃであることに気が付いた、と言った方がよかった。男は壊れたおもちゃが山積みになっっている所まで行くと、そこへ無造作に二つのおもちゃを捨てた。TOYは叫ぼうにも声は出ず、身動きしようにもできなかった。そこへは、次々と壊れたおもちゃが運ばれて来る。それらは次々と山積みになれ、TOY

はどんとその下へ埋もれていった。

TOYは勢い良く上半身を起こした。一瞬ボーツとしてから、急に辺りをキョロキョロと見回す。そこはクルマの中だった。1BOXタイプのワゴンだ。3シートで後二つのシートは背もたれを倒してベッドにすることが出来る。TOYはそこで眠っていたのだ。

体中に汗をかいていた。顔にも汗が浮かんでいる。

「ひどい夢を見てたようね、ハンカチ、使う」

そう言うのは高野未来だった。クルマのドアの所からTOYの様子を窺い、ハンカチを差し出している。

「何でこんな所にいるんだ」

「『何で』って、自分が呼んだんでしょ」

それを聞いて、すぐに思い出した。．．．そう、自分が呼んだのだ。TOYは高野が差し出したハンカチには構わず、そばにあったカバンからタオルを取り出して顔の汗を拭いた。高野は溜め息をついてハンカチをしまった。高野はクルマのそばで、やきそばを作っているJOEの所へ行った。TOY用の折り畳みの椅子が広げてあり、高野はそこに腰を降ろしてJOEに悪態をついた。

「何なの、あれは。失礼すぎよ。自分で呼んでおいて、

寝てるし、ハンカチ出しても使わないし。．．．彼は、いいつも、ああなわけ」

JOEはコックンと頷いた。

「十中八九」「人間嫌いとか」「おそらく」「ひどく暴力的とか」JOEは、コックン、コックン、コックン、首振り人形のように首を縦に振り続けた。

「じゃあ、あなた、どうして一緒にいるの」

JOEはピタッと首の動きを止めた。

「TOYさんは自分勝手に、わがままで、女好きで、殴るわ、蹴るわ、轢くわ、撥ねるわ、撃つわ、巻き込むわ、金返さないわ、貸さないわ、食いもの横取りするわ、たまにしか焼肉食わせてくれないわ、だけど、．．．でも、悪い人じゃないです。．．．昔、自分を助けてくれたです。命かけてくれたです。TOYさん、引き受けた仕事は体張ってやる人です。いい人です」

「．．．『轢く』、．．．『撥ねる』、．．．『撃つ』って、何を．．．。ちよつと、本当に大丈夫なの。とてもまともな人には聞こえなかったんだけど」

「．．．あ．．．」

「え、何が『．．．あ．．．』なの」

「気のせいっす、気のせいっす」

そう言って口笛を吹きながら、JOEはやきそば作り
に励んだ。楽しそうな顔をしているが目は笑っていない。

「どけ」

高野の背後で男の声がした。振り向くと、そこには短
い髪、プラチナブロンドの男が立っていた。TOYだ。

「失礼ね、雇い主に対して」

「知るか。それは俺の椅子だから『どけ』と言ったま
でだ。俺のことが気にいらなければ他に頼め。別にあん
たに依頼を断られたってこっちは全然困りゃしない」

「イーヤ、困るっす」「おめーは黙ってる」

今、TOYに降りられると高野は困る。高野は、フン
と言って立ち上り、JOEの椅子の方に移った。

「あ、そこは」とJOE。高野はギロツとJOEを睨
む。JOEはビクツとし、その後、深々と頭を下げた。

「どうぞ、『お客様、第一』っす」

TOYはJOEの作ったやきそばを受け取り、それを
食べ始める。高野はそれをじつと眺めている。

「ねえ、盗聴器って、いつまであのままにしておくの。
気になって仕方ないんだけど。いいかげん外しちゃだめ
かしら。あたしが『気が付いた』ってことにすれば、あ
なたたちのことはバレないでしょっ」

「だーめ。あなたが普通にしてて気付くとは思えない。
誰かが関与してますよって教えるようなもんだ。それに、
あなたの電話の内容は、俺たちも聞いている」

「え、なんで」

「勘違いするな。あなたの私生活になんか興味はない。
相手の言ってることから奴の情報が得られないか、探っ
てるだけだ。誰がグルかわからないからな」

高野は、奴・・・多田だけでなく、TOYにも聞かれ
ているのかと思うと、余計外したくなった。

「ところで、盗聴ってどうやって調べるの。今後の参
考にしたいの。自分で見付けて外せるくらいにはなりた
いわ・・・今、あたしの所にあるのを見付けたときって、
やつぱり、大変だったの」

「イーヤ、一発さ。周波数398・605MHz」

「え、簡単だったってことなの・・・どういっこと・・・
なんで、そんなに細かい数字までわかるの」

TOYが言うところによれば、その周波数を使った盗
聴器が最も多いのだそう。そのため、覚えてしまっ
ているのだという。盗聴器も作る側から考えれば、できる
だけ構成をシンプルにし、大量に作って一個あたりのコ
ストを下げたい。それには、やはり同じ部品を使うのが

よい。いくつか代表的な周波数があるそうだが、398.605MHzの電波を使った盗聴器が最も多いのだそう。そして、これを見付けるときはレシーバを使う。レシーバに、盗聴によく使われる周波数を複数個セットしておき、順番にスキャンを繰り返す。今回の場合、スキャンを始めた日、高野が電話を取った時点でこれにひっかかり盗聴が発覚したのだった。

TOYは食事が済むと、立ち上ってクルマに戻る。戻るときに高野に声をかけた。一緒に来いと言っている。TOYはクルマの中でノートパソコンを出し、それに伝送レートの高い携帯電話を接続した。高野はそれをTOYの隣に座って眺めていた。

「途中報告だ。二日前の昼間、多田の勤務時間中、奴のアパートに侵入してきた」

高野は驚いてTOYの顔を覗き込んだ。

「どつちつて」

TOYの話では、ピッキングガンという物を使ったのだという。高野は、鍵師と呼ばれる人が使う七つ道具で、TOYが中腰になりガチャガチャと空巢のように鍵を開ける姿を想像したが、それとは少し違うようだった。それは、拳銃に似た格好をしており、その先端に『七つ道

具』のような棒状の工具がついているという。鍵を開けるときは、先端を鍵穴に入れ引き金を引く。あとは勝手に先端が動き、開錠してくれるのだそうだ。

TOYは、パソコンの画面に画像を映し出した。

「奴の部屋をデジカメで撮ってきた。あんたを狙う理由がわかるかもしれねえ。・・・見てみな」

高野は画面を覗き込んだ。見るやいなや顔をしかめる。ひどい散らかりようだ。目を覆いたくなる。部屋の中にゴミが散乱しており、足の踏み場もない。TOYは一定間隔で画像を切り替えていく。部屋のゴミは溢れ、キッチンや玄関の方まで浸透している。そのくせ、かわいい女の子の絵は綺麗に飾ってある。ビデオテープを仕舞った棚も綺麗に整頓されている。高野は気分が悪くなってきた。手掛かりを探すところではない。画面から目をそらす。ハンカチを取り出して口にあて、息を整える。

「何か気付いたことは」

高野は首を横に振った。

「ごめんなさい。役に立てなくて」

「いや、構わん。最初からこれに期待なんかしちゃいない。『何か気付いたら拾いもん』くらいにしか考えてなかった。予想通りだから安心しな」

高野は、それなら初めからそう言ってくればいいのに、と思った。気合を入れて見る必要はなかったわけだ。

「これで俺が気になった点がいくつがある。テープルの上に置かれたデジタルカメラ。壊れたままのパソコン。それから・・・大きなナイフ」

「それが、どうかしたの。確かにナイフは怖いけど」

TOYの分析はこうだった。デジカメとナイフが綺麗だという。絵やビデオテープからもわかるように、部屋が汚なくても大事なものは綺麗にされている。デジカメはまだ新しい物だったが、既に何回か使った痕跡が見られた。不思議だったのは、撮った画像データの所在だった。カメラの中に入っていたメディアには残されていない。パソコンはあったが、大分前から壊れたままのようで、埃を被っていた。カメラの中以外に同型のメディアがないか探したが、それらしいものは見当たらなかった。どこにしまったのが謎だ。ナイフの方は厚みのある大きなものだった。よっぽど気になっていられるらしく、刃の部分には一片の曇りもなかった。しかし、鑑賞用にしては柄の部分の汚れが目立つし、飾ってあったわけでもなかった。果物を剥くには大きくて不便だし、多田にキャンプの趣味があるわけでもない。

「ねえ」と高野。「まさか・・・まさか、このナイフであたしを襲うつもりなんじゃないでしょうね」

「さあ。そうかもしれないし、違つかもしれないし」

そう言い、TOYは、今度はターミナルソフトを起動させた。ノートパソコンに接続した携帯電話を使い、どこかのコンピュータにアクセスしようとしている。

「今度は、何なの」

「今から、奴の会社のマシンに侵入する」

「え、そんな簡単にできるものなの」

「事前調査はしてるさ。穴は見付けてある」

たしかにセキュリティのしっかりしているコンピュータへ操作テクニックだけで侵入することは難しい。解読ツールを使う手法もあるが、人々を利用する方が簡単だ。いくらセキュリティの高いツールを使っても、それを使う人間が使いこなしていないと意味がない。

先日、TOYは、この会社のOLをナンパして飲みに行っている。そこでわかったことは、この会社の人の出入の多さと、パスワードの変更頻度の少なさだった。どこの会社にも必ずコンピュータの苦手な者がいる。そこはセキュリティのホールになり易い。単純なパスワードにしていたり、パスワードを他人まかせにしていたりす

る。また、退職した者のアカウントが残ったままになっていることもある。もちろん、外部からのアクセスを充分制限しているところもあるが、この会社は、あまいところがあった。TOYは、外部からアクセス可能で、最近、退職し、単純なパスワードにしていた者のアカウントを既に見付けていた。

そこからログイン・・・侵入する。

次に、TOYはバッグからファイルをひっぱり出し、ペラペラとページをめくった。あるページで手の動きを止め、そこに示されている手順をすばやく入力する。

「何をしているの。それは、何」

「ああ、管理者の権利を盗るための裏マニュアル」

それには、何のツールを起動させ、どうすると管理者になれるかの手順が書かれていた。オペレーティングシステムや、アプリケーションソフトにはバグが残っており、ある操作をすると、このように管理者になれてしまうことがある。もちろん、いつまでもそのバグが放っておかれるわけではないが、それが治れば裏マニュアルも別の方法が検討され、新しい方法に修正される。

管理者の権利を得てから、次にTOYはパスワードのファイルをダウンロードした。パスワードファイルとい

っても、本物のパスワードそのものではない。そのファイルには、暗号化されたパスワードが記述されている。

この暗号化は不可逆方式で、これから元のパスワードを推定するのは難しい。できない話ではないが得策ではない。もつと簡単な方法がある。総当たりで、全てのパスワードを調べるのである。風潰しだ。TOYはパスワードの解析プログラムを起動させると、多田と思われるアカウントの、暗号化されたパスワードを入力した。この解析プログラムの核は、この会社で使用されているシステムのパスワード暗号化プログラムと同じものである。これに、0から9、アルファベット、記号を片っ端から組み合わせた文字列を入力し、出てきたものと、先に入力した暗号化されたパスワードを比較する。一致すれば、そのとき生成された文字列が実際に使用されているパスワードということになる。昔、この方法は非効率と思われるが、コンピュータの高速化が進み、今では、有効な手段となっている。

「よし、奴のパスワードも盗んだ。今度のログインが本名だ。多田に化けて侵入する」

「え、『今』、なの。多田は、仕事してるんでしょ。バレたりしないの」

「なーに、新しいファイルを作ったり、今あるファイルを消したりしなけりや大丈夫さ」

TOYは、多田のディスクの内容を片っ端から覗いた。探しているうち、画像ファイルらしきものをいくつか見つけた。一通り見終わった後、一旦ログアウトし、再び管理者としてログインしなおした。マシンの設定を変更し、また、多田として入りなおす。そして、最近の日付になっている画像ファイルをダウンロードした。

最後に、また管理者としてログインし、自分のアクセスログを消して接続を切断した。

ダウンロードした画像ファイルは暗号化されていた。その暗号化は、TOYの所では復号できないもので、その復号は情報屋のクルドにまかせた。クルドにファイルを送ってから二、三時間後、電話で連絡があった。

「にやーあTOY。しゃっきの復号できたよーん」

「ああ、サンキユ、もつとかかると思ってた」

「あたちのスパコン、なめないでえ」

「金はいつものように萬屋でいいな」

「いいわよー。．．．』JOEちゃん一晩』でもいいけのねー。．．．ちょっと訊いちみてよー」

TOYはJOEの方を向いた。

「クルドが、『お前を一晚で無料でいい』ってさ」

JOEはビクツとし、顔を引き攣らせ後ずさりした。

「じょ、冗談きついつす。やめてほしいつす。勘弁してほしいつす。まだ、分け前減った方がましつす」

「どつしたの。何かあるの」と高野。

「これつす、これつす、これなんす」JOEはゲイを表すポーズをとった。「掘られるのは、嫌つす」

「ホモ。．．．その『ながれ山 三四郎』さんて人が」

「．．．誰つすか、それ。違つつす『クルド』さんす」

TOYはクルドとの会話に戻る。

「JOEと勝手に交渉してくれ。俺は構わん」

「つひよーつ、そりやないつす、ひどいつす」

TOYはJOEの反応には構わず電話を切った。そして、クルドから送られてきた復号後の画像を開く。見るや否や真剣な顔付きになった。しばらく見入ったあと、溜め息をつき、いきなりクルマの内壁を拳で叩いた。

「ね、どつしたの。何の画像だったの」

「今日、あなたに来てもらった本当の理由は、これを見てもらつたためだ。．．．予想が当たつちまった」

パソコンに映し出された画像を高野とJOEに見せた。そこには女性が血だらけになって倒れている姿があった。

刃物で刺された後のようだ。高野は血の気が引いていった。顔を背ける。体が震える。高野は恐る恐る画面に視線を戻す。TOYは写真を切り替えていく。顔のよく写っている画像で止めると、顔の部分を拡大した。

「で、ぶっということ・・・なの・・・これ、は」

「最近あった二件の通り魔事件の被害者達だよ。あなたと多田の共通点を探したら、出身大学が同じだった。さらに調べると研究室も同じだった。年に一回、研究室でOB会が開かれてるな・・・そのとき、あなたと多田は会ってるんだと思う。あなたは記憶に残っていないかもしれないが、向こうはあなたのことを覚えてる。それから、通り魔事件の被害者も、この研究室の出身者の筈だ。こっちで調べた出身者のリストに、同姓同名の名前があった。見覚えはないか、よく思い出してくれ。とにかく、何があったか知らねえが、あいつは、あなたのことを、この被害者と同じ目にあわせたいようだな」

高野は気分が悪くなる。吐き気をこらえて被害者の顔を見た。TOYから写真週間紙を受け取り、それに出ている写真も合わせて見てみた。確かにニュースでなら見た覚えのある顔だ。高野は年代のズレている先輩、後輩に関しては、院卒を何人が知っている程度で、他はほと

んど知らなかった。あきらめなくなるが、それをこらえて思い出してみる。OB会。沢山の人。広い部屋。立食のパーティ。なつかしい同級生、教授。ほとんど会ったこともない先輩たち、後輩たち・・・その中で、グラスを持ちながら「ごめんなさい」と言いながらそばを通り過ぎて行った女性を思い出した・・・そう、その人。それから、部屋の真中で話をしている女性。高野は思い出した。さらに、部屋の隅で誰とも話さずポツンと一人でいた太った男・・・

「わかった。思い出したわ。この被害者、二人とも、いたわ。それから、あいつ・・・多田も。思い出せなかったのは、髭のせい。報告書にあった写真と違って、生やしてはいなかった。身綺麗にした」

「そうか、これでほとんどつながった、な」

「ねえ、助けてくれるんでしょ」

「あたりめえだ。こんな、人をおもちやみてえに壊すような奴は人間じゃねえ。あなたのことは、奴を殺しても守るさ・・・安心しな」

TOYは高野が驚くほどの冷たい目をしてそう言った。

以下、次号

黒竜に騎る男

砂塔 悠希

森のはずれは小高い丘を下った清らかな小川の側だった。森を歩いているときには感じなかった勾配を急に感じてクリスはヒースの茂みに膝をついた。ざわざわと薄紅色の小さな花を揺らす風が、水の匂いを運んでくる。

「なんか腹、減らないか？」

ルデイが鎧の腹に手をあてて呟いた。陽はまだそれほど高くはない。スイロカムラスが怪訝な顔をして振り返るが、何か思い立ったように答えた。

「少し、水際で休みましょう。先は長いのですから」

ヒースの向こうにさほど深くない小川が西に向かつて流れている。膝ほどもないだろうその小川の向こうにはまたヒースの野、そして林。小川は元をたどれば湖になり、下れば大地を削りながら海に注ぐ。そのころには河から丘に登ることは困難となる。切り立った岩の壁は来

る者を拒み、出るものを封ずるように海との境をなす。それがこのスカルツの2/3を占めるハイランド地区だ。北に行くほどに厳しい気候、痩せた土地を嫌い、人間の集落はほとんどいっぺいほどない。

「長いってどのくらいかかるン？」

木陰に腰をおろし、長靴を脱いで素足を水に浸しながらルデイが尋いた。

「1日半から2日と言うところでしょう」

スイロカムラスが木の実を口に運びながら応える。その声に険はない。クリスは少しほっとして木陰に横たわると目を閉じた。

さらさらと流れる水音と、葉ずれの音。空の遙か高みでなく鳥の声。まるで、何も知らなかった幼い日が戻ってきたような静かな時間。

「眠ったのか？」

「少し、森の精気に酔われたようです。このまま少し……」

二人の声をうつろに聞きながら、クリスは暗闇の中に沈んでいくのを感じていた。

「無防備ですね」

すっかり眠り込んでしまった様子のクリスを見ながら、

スイロカムラスが少し呆れたように言った。

「だって、何の気配もしないだろ。少しでも変わったことがあれば飛び起きるさ。俺もいるんだし」

ルデイがこともなげに言う。

「背中を預けると言うのですか」

「出会ってからずっと。いつもそうしてきたよ」

12の時、悲壮な顔つきで騎士見習を志願するとクリスが言った日、何か心配でつい、俺も一緒に騎士になると言ってしまったから、それからはいつも一緒だった。志願するには1年早く、クリスなどは同じ年の子供にすら見劣っていたにもかかわらず、すんなりと見習いになれた。

「常に危険の中に？」

「近衛の見習だったから、それなりに、ナ」

堅い乾し肉をくちやくちやくと噛みながら、ルデイは遠くを見るように答えた。

今思えば見習い時代からクリスはちよつと変わった任務に就くことが多かったように思う。第二王子アレックスの直属であった所為か、征伐や掃討と言った任務についていくことも結構多かった。幸いと言うべきか不幸にもというべきか、見習い時代にルデイの実戦経験はない。

精霊使いとして、実戦部隊の後方に置かれたクリスのさらに後方を護るのが主な任務だった。武闘派の王子の直属だけに先輩近衛の質も高く、ルデイやクリスの所属していた団は、王国内最高の近衛兵団とすら呼ばれていたのだ。それだけに見習いの訓練も厳しく、常々言われていたのだ。『われわれが背中を預けられるくらいに強くなれ。おまえたちは王子を護る者なのだから』と。

「！」

ルデイはぞくりとしてクリスを振り向いた。森の中で二人の会話が、旅立つ前の城での陛下との謁見の会話が、断片的に戻ってくる。『ヴェルゼヘルサムは王子を狙っていました』『ただ一人の供人になるが、王子をよく守ってはくれまいか』

「俺、一人つきりか？」

呟いたルデイに、何のことかとスイロカムラスが眉を寄せる。ルデイの視線を感じたのかクリスが身じろぎした。

「サラつての、いつ頃出たン？」

ルデイが脈絡のない問いを投げかけたとき、クリスが目を覚ました。

「ちようど丸1日前です。あなた方を捕縛したのは彼女

を見送った直後でしたから」

足についた水を拭い取り、長靴を履きながらスイロカムラスの言葉を聞いていたルデイは、ふいにいやな顔をして

「――、俺に敬語をつかうな」

ぶつきらばうに言うと、乾し肉の入った袋をクリスに投げた。

受け取ったクリスは小首を傾げ、言葉のわりに不機嫌な様子でなくどこか急に大人びた表情で行く手を見据えるルデイに何か決意のような物を感じながら、肉の小片を口に含んだ。

「急いで追いつくって訳でもなさそうだな。でも、行くんだろ」

ルデイの言葉にクリスは頷き返し、袋をルデイの手に戻す。

「無事を確認するだけでいい。先に着いたところで彼女ではどうにもならないだろうから、きつと追いつく。どこかで出会えるはずだよ」

「やはりそうですか」

「巨りをするにはそれなりの経験と資格がいる。資質はともかく経験不足は命取りだ」

「無茶をしていなければよいのですが」

「急ごう」

一行は小川を越え、まっすぐにバレンツの岬を目指した。丈の低い草とヒースの丘を登っては下り、小川を渡り、そしてまた再び丘を登り……。起伏の激しい地形が三人を消耗させはしたが、気分は高揚していた。目を遮るもののない不毛の丘は敵の目に晒されもするが、こちらの目にも発見しやすく森を歩くような気疲れはない。霧の出はじめの夕刻前までに距離を稼ごうと一行は終始無言で歩いた。高いところで鳴く鳥の声と鎧の金属が擦れる音、ざわざわというヒースの葉擦れの音。岩肌を渡る甲高い風の声が冷気とともに深まる秋を運んでくる。

やがて陽が西に傾き、海から湿気を含む風が吹いてくる頃、東に連なっていた山がとぎれ、眼下に小さな入り江が見えてきた。この丘を下り、遙か行く手の丘を越えればバレンツの岬だ。入り江の底には白い霧が澱んでいる。もう間もなくあの澱みは視界一杯に広がってしまうだろう。霧は方向感覚を狂わせる。まだ陽が沈むまで間があるが、安全なところで体を乾かし、体力を保存する必要がある。この霧に含まれる湿気が意外に体力を消耗させるのだ。三人は入り江近くまで下りたところで夜営

を組むことにした。

入り江の近くであれば星が見えなくても風と潮が時間の流れを教えてくれる。三人は交替で見張りに立つことにし、焚き火を囲んだ。

陽が沈みきってからどれほどたったのか。焚き火越しに霧の向こうを見つめていたクリスがふと気づいたように呟いた。

「静か、だな」

「ヤ、な感じだ」

いつの間にか風は止まっていた。獣を避ける為に焚いたたき火の煙がまっすぐに上っている。炎の前でパチパチと木のはぜる音がする。川でとったばかりの新鮮な魚を串に刺し、火で炙りながらルデイが濃い霧のわずかな影の違いを探して、頭を巡らせる。クリスは精霊のざわめきに耳をそばだてる。

岸を打つ波の音、規則的なその音の中にゆらぎを感じたのは気のせいなのか？クリスは小さく呪文を呟くと影の精霊をたき火近くに呼び寄せた。突然視界を奪われたルデイが驚いて身を固くしたが、すぐに息をひそめる。

ザ……ザザ……ザン……ザ……ザザザ……ザザン……ザザン……

それほど近くはないが何か波を分ける音を聞き取って、じつと海の方に目を凝らす。いかにエルフの視力を持ってしてもこの白い闇は見通せない。

波の揺らぎは徐々に大きくなりやがて木の擦れるような音が混ざり始めた。行く手の方から小さく聞こえる木の擦れは、だんだんに大きくなり、少しずつ小さくなっていった。

どれほどの時が過ぎたのか、波の揺らぎが完全に収まり緩やかに風が吹き初め、これまで息を潜めていた虫たちが一斉に鳴きはじめてやっと、クリスはたき火を守っていた影の精霊を返した。その明るい光に呼応するようにルデイが身じろぎし、

「移動、しなくて平気か？」

押し殺したような声で訊く。

「近づいてくれば虫が教えてくれるさ」

できうる限り小さな動作で薪を火にくべると、クリスは少し焼きすぎになった魚串を手を取った。食べられるときに食べ、眠れるときに眠る。里を出てから身につけた知恵だ。同じ様に緊張を解くべき時には解く。筋肉をほくしておかなければいざというときに柔軟な対応ができない。

「この調子でいったらどれぐらいでキルサーンに着くん
だ？」

ルデイも魚をほおびりながら訊いてくる。視線はクリ
スの後ろ、体の緊張は解いているが精神の緊張が解けな
い。

「……岬まで半日、亘りに半日、戻って一日半、キル
サーンまで急いで二日。最短で五日半つてとこだな」

クリスが指折り数えながらのんびりとした口調で言う。
それまで敵はチャ・ザとシヤナ皇子を見つけたさずにい
てくれるだろうか。

「長いなあ」

ルデイがぼやいた。緊張が解けてきた証拠だ。串をた
き火にくべてじつと火を見つめる。

「待っている方はもっと長く感じるのでしょうかね」

音も立てずに起きあがり近づいてきたスイロカムラス
の声にルデイはびくつきとして顔を上げた。整った顔立ち
のエルフは表情を見せずに静かに火の傍に腰掛けた。入
れ替わりにクリスが体を丸めて横になる。眠りはすぐに
やってきた。

編集雑誌

幼い頃は、世の中の変化なんてそれほど肌で感じるもんじゃない。それに今よりかはきつと時間の流れは遅かった。

家の中にいたって、時間の流れは急いでいると感じることがある。その流れにたゆとうには、早すぎて溺れてしまいそうなのに。大気のいたるところにきつと電波が飛び交って、すれ違う人をつい警戒する。こんなことばかり考えていたら気が狂いそうだ。

けれど多分、世界のどこかと自分の中に、空や水や緑の綺麗な場所が残っていて、私たちは生きてゆけるのかなあ。

そんなことに気持ち向けるには、気力がある。けれど息継ぎしつつ、私たちはそれを保ち続けるのでしょうか。

(吉村)

r i f i f i も創刊から一五年を数え、ようやく一つの区切りを迎えました。よく一五年、50号分も書きつづけてこられたものだと、支えてくださった皆様に感謝しつつ、これからも稚文を重ねてまいりたいと思います。

遅々として進まない不定期連載は、まだまだ序盤だと

言うのに、増えていくのは番外編ばかり……だって、番外かいてるほうが気が楽なんだもの。

(砂塔)

世紀末に、そもそも1999年に滅ぶはずだった世界がまだある！なんてこつた。

きつとr i f i f i がちゃんと出なかつたから、神

(?!?)も滅ぼすに忍びなかつたのだろう？

それとも、世界はすでに滅んでいて、これは幻か、誰かの夢なのかもしれない？誰の？

ナンノコツチャ……。

(白坂)

最近、自分の書く小説のタイプが幾つかあるのに、みんな同じPNでいいのかなあ、なんて思い始めました。でことで、読み始める前に雰囲気がそれとなくわかるように、PNをアレンジし始めました。あまり意味ないかなあ。ところで、50号は難産でしたねえ。みなさまの苦労が滲み出していて、良い物になっているような気がします。わたしはまだまだ元気です(たまたま眩暈がして通院してますが…)。これからバリバリいきます。皆さんも一緒にがんばりましょうね。

(霜越)

なんてことだ！ みんなと知り合ってからもう一五年も経っているぞ！ 月日がたつのはおそろしく早いものだと改めて実感。え？ 2年越し？ え？

(齊藤)

【編集後記】

たくさんさんの時間と、私以外のスタッフの皆様のたくさんさんの努力で、ついに仕上がった50号。本当に有り難い限りです。

名ばかりの編集長ではいけないと思いつつ、何の役にも立っていないけふこのごろのわたくし。けれどついに50号とは、なんと感慨深いことでしょう。

私がまだ二十歳になる前に、最初のr i f i f i は生まれました。そして今、もう三十代も半ばを越えようとしているわけです。

どんなにスローペースになっても、わたしたちの大切なr i f i f i を続けていけたら・・・と願ってやみません。

(猫)

本当に久しぶりにr i f i f i が出る！世紀末号のはずが、新世紀号だ！

(「ちゃんと原稿出さなかったからだろ！」)

それも、なんと50号だ！(「よく続いたもんだ。」)

それも今度から、Web化だ！すごいぞ！

(「自分じゃ何もしてないくせに！」)

これでコンビニでのコピー取り何千枚と製本・カッティング地獄から開放される！

(「それぐらいしか、役に立ってないくせして！」)

何せ、入院して膝についての作業とかやり難くなっちゃったしい。

(「靱帯なんか切ったからだろが！」)
今世紀もよい世紀でありますように！

(紅)

はっはっはっ。とうとう出てしまいましたね、50号がっ。E O F にもついに電子化の波が押し寄せてはじめてころが懐かしいのお。「白い原稿に向かって文字を書くからこそ『物書き』なのだー」などの賜っていたのも遠い昔のことよのお。などと感慨にふけりつつも新装開店となつたr i f i f i をこれからもどうぞよろしゅうに。

(翼)



EOF



a commemoration
number

